

せい か ほう まさ  
星 火 方 正

～燎原の火は方正から～



日本の大使として初めて方正日本人公墓に参拝した宮本雄二夫妻

### なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「<sup>ほうまさ</sup>方正友好交流の会」とした。

### なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、インターナショナルな友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

# 星火方正（第6号）～燎原の火は方正から～

## 目 次

「方正友好交流の会」について考える	大類 善啓	1
方正テレビ局訪日「方正と日本人」を取材	編集部	5
宮本雄二大使 方正を訪問し公墓参拝	編集部	7
衛藤瀧吉先生を偲ぶ	大類 善啓	9
曠野に果てたちはは	衛藤 瀧吉	11
方正行	山村 文子	13
身も心もまる裸	北澤 博史	15
酷寒の風 摺るがぬ友好	石 金楷	17
前事不忘 後事之師——方正県日本人公墓の前に立って——	小野寺 武男	18
新潟第7次清和開拓団勤労奉仕隊記録の発掘 —殉難者への慰靈の心をこめて—	高橋 健男	24
満州建設勤労奉仕隊に参加した記録について	野田 良雄	28
方正の『日本人公墓』と『撫順戦犯管理所』	芹沢 昇雄	30
参考記事 「非戦」の花、絵本に 中国の人々から託された種	朝日新聞西部版	31
参考記事 海を越え、時を超えて咲く朝顔	朝日新聞全国版	32
参考資料 「原子爆弾に思う」	新華日報	33
「満州移民の村」のけじめ 『満州泰阜分村一七〇年の歴史と記憶』編纂にたずさわって	猪股 祐介	35
中国に立つ「日本人公墓」に思う	聖教新聞	40
日本人公墓 墓参へ 平和条約30年 開拓民の足跡たどる	徳島新聞	41
中国残留「不忘の碑」 体験者訴え 調布に建立	東京新聞	42
満蒙開拓平和記念館を設立へ	「日本と中国」	43
異説 日本人公墓の由来	奥村 正雄	44
ご案内 「友好の原点を歩く」旅と「方正友好交流の会」総会	編集部	47
日本に残留し定住したある中国人 ～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第4回	大類 善啓	50
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの	編集部	56
書籍紹介 報告	編集部	57



## 「方正友好交流の会」について考える

大類善啓

前号5号は今までの中では一番厚い会報になった。南野知恵子・元法相の方正訪問記事や石原政子さんの手記、井上征男さんの小説など、長い文章を掲載したことも要因だった。この調子で充実した会報が毎号続けられるならいいが、そうもいかないだろう。改めて会員の方はもとより、支援していただいている方々からの原稿を今後も期待したい。

さてその前号に関して、ある人から私の方に、方正公墓の存在はかなり知られている。中国の温情に感謝するだけでなく、もっと藤原長作さんの偉業などを紹介すべきだという意見をいただいた。

そこでこの機会に、「方正友好交流の会」について、私の個人的な見解ではあるが、先の意見に答えたいと思う。皆さんのご意見もいただければ幸いである。

### まだまだ知られていない日本人公墓

確かに、旧満州の研究者や日中関係者などの少なからずの人たちの間に、公墓に対する認知が進んでいることは事実だろう。しかし、以前にも記したことはあるが、私たちが編集して出版した『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」—ハルビン市方正県物語』(以下、『方正物語』と略す)を刊行した2003年当時、私の周りにいらした中国通のジャーナリストの方々も、ほとんど公墓の存在を知らなかった。この本には、大類が『水稻王 藤原長作物語 中国の大地に根づいた日中友好の絆』という標題で、藤原長作さんの長年に亘る、方正県から中国全土に広がった藤原式稻作栽培方法などの業績と同氏の生涯について、『米に生きた男』(及川和男著)や、坂本龍彦さんが書かれた「種まく人」(『昭和にんげん史』所収)、『人民日報』などの文章を取り入れながら11頁にわたって紹介もしている。

それは10人ほどの小さい会合だった。『方正物語』を買ってもらうべく、その時、「ハルビン市郊外の方正県に日本人公墓があるのをご存知ですか」とお聞きしたところ、皆さんご承知ではなかった。その場にいた、日中関係に長年携わっているNさんから翌日、「何をかいわん。あの中に3人、北京支局長を経験した人たちがいた。その人たちも公墓の存在を知らなかった」というメールをいただいた。Nさんは、知らないことを批判しているわけではない。そういう状況にあることを、ある種の感慨を込めて嘆息されたのだと思う。

「世代交代をしよう。大類よ、事務局長をやれ」と、牧野史敬さんや奥村正雄さん、木村直美さんら先輩諸氏に尻を叩かれて、事務局長を引き受けたのも、方正日本人公墓の存在を多くの人たちに知つてもらうこと自体が、重要な活動であると認識したことにはかならない。

方正地区に経済的な支援などを行うような大それたことなど、私の任ではない。ささや

かながら、公墓の存在を PR し、それが持つ意味を知ってもらう活動なら、少しあは私にもお手伝いできるのではないか、ということだった。折も折、当時は、小泉首相の靖国神社参拝に対する反発もあり、また中国の愛国主義教育の成果！によって、中国の若者たちの間にナショナリズムが前面に出てきたような時代である。

## ナショナリズムに歯止めを！

そういう状況だからこそ、ナショナリズムを超えてインターナショナルの視点をもつていた周恩来ら、当時の中国指導部の国際主義的な精神こそ、今一度思い起こすべきではないかと考えたのだ。その象徴的な存在が「方正日本人公墓」だった。

実際、昨秋の朝日新聞に掲載された拙文を読んだ人からは、「近頃、中国に対していい感情をもっていなかったけど、あのお墓のことを知って、中国を見直したよ」と言われた。

戦前から 1960 年代前半にかけての中国共産党の国際主義的な精神は、文字通り、足が地に着いていた。つい最近知ったことだが、1945 年アメリカが広島に原爆を投下した直後の 8 月 9 日、中国共産党系の重慶で発行されていた『新華日報』は、科学技術の平和利用ではなく、多数の人々を一瞬に殺戮する手段として、原爆を使用したことを痛烈に批判した。延安では、「ざまあ見ろ」という声があつたらしいが、それを聞いた毛沢東は「激怒した」という。当時中国に滞在されていた武吉次朗さんの証言である。

参考までに、当時の『新華日報』記事の全文を 33 頁に紹介した。これは日中関係研究所のメンバーであり、我々の会を支援していただいている成田晃一さんが、北京から全文を取り寄せられ、武吉次朗さんが翻訳されたものである。

このような国際主義的な精神こそ、どのような遠方にあろうとしても、人の痛みを自分の痛みとしてとらえるというシモーヌ・ヴェイユの思想であり、インターナショナルな精神ではないだろうか。

## 中国の若者にも知らせたい日本人公墓

会報 1 号を出してからすぐ、私に北京の中国国際放送局の人から電話がきた。偶然インターネットを見ていたら、「方正友好交流の会」を知ったというのだ。北京の女性記者は、初めて方正県の日本人公墓を知って驚き、すぐに方正に飛び、関係者に取材したという。彼女は、「方正日本人公墓」について特集番組を創っているので、翌日改めて北京から電話をして話を聞きたいという。（会報 2 号参照）その時彼女に、中国の若者にもぜひこの公墓を知ってもらい、民族主義的発想を超えた国際的な友愛精神の重要性を認識してほしいと言うと、その女性記者も全く同感だと賛意を表してくれた。

早くからこの日本人公墓に関わってきた団体やグループは、これまで様々な形で公墓を支える活動を続けてきた。ある団体は基金を集め、方正県政府を通して、参拝道路の補修や維持管理に使ってもらった。またある団体は、不再戦のモニュメントを作った。

公墓の周りに広がる公園に、平和の願いを込めて植林した団体もある。その木々が夏に水不足で枯れることが少なくないと県政府から聞くと、散水のために井戸を掘ってこの悩

みを解消した団体もあった。

しかし、こうした関係団体のそれぞれの行動は、ここ40年余り、すべて個別の行動に終始した。各団体が横の連絡を取り合い、方正県政府の要望を聞き、それを受け各関係団体と協議しながら公墓の維持管理に積極的に関わっていく、という組織や機構はこれまでになく、未だにない。

## 今こそ、世界市民としての発想を！

こういう状況の中で、私たちの会は、当面何をし、その先に何を見据えていくべきなのか。前述のように「開拓団関係者をはじめ、私たちはみんな公墓のことは知っているし、それぞれやれることをやってきたから、それはもういいのではないか」という意見もある。しかし、まだまだこの公墓の存在を知らない人は多い。日頃は過去の中国侵略の歴史についてサークルなどで学習している人たちでさえ、公墓の存在を知らない人が少なくない。まして一般的日本人では知らない人がまだ圧倒的に多い。

私たちは、このような事実を知るにつけ、更に公墓の存在を知られるように日本だけでなく、中国の人たちにも知ってもらうべく活動していきたいと思う。

前号の会報で「日本人公墓は何を語るか」を執筆した凌星光（福井県立大学名誉教授、社団法人 日中科学技術文化センター理事長、日中関係研究所所長）さんは、国際主義的な精神で建立された日本人公墓を、日本人たちばかりでなく多くの中国人も知る必要があると、中国に出張する度に、資料を携えて行く。

そしてまさに、ここに我々の活動の中心的な課題があると思う。それこそ国際主義的な精神である。

国家的な志向や民族主義的な発想を超えて、世界市民的、あるいは地球市民的発想で物を考える時代に、現代は来ていると言つていいだろう。

昨年の8月2日、衆議院の本会議で、「国連創設及びわが国の終戦・被爆60周年に当たり更なる国際平和の構築への貢献を誓約する決議案」なるものが可決された。そこには、核兵器の拡散、テロリズム、難民問題、世界環境問題など、国家を超えて取組むべき課題がますます増加している現実を認識した上で、「政府は、日本国憲法の掲げる恒久平和の理念のもと、唯一の被爆国として、世界のすべての人々と手を携え、核兵器等の廃絶、あらゆる戦争の回避、世界連邦実現への道の探求など、持続可能な人類共生の未来を切り開くための最大限の努力をすべきである」と決議されている。「憲政の父」といわれた尾崎行雄が国会に「世界連邦建設に関する決議案」を提出して60年目の年に、衆議院議員340名の賛成で成立したのだ。

江戸時代は、300ほどの藩に分かれて争いが絶えなかつたが、明治になって「廢藩置県」という革命が成立した。それまで藩が独立して軍備を保有し交戦権をもっていたのを、中央政府に軍備を集中した。同じように、各国家の交戦権などを世界連邦政府に委譲していくような発想が求められる時代が、今來ていると思う。国家を超える民族的な発想を超えて、世界市民、地球市民として人々が生きていくべき地点に今こそ立つ時ではないだろうか。

日本人公墓の存在を支えた思想、国際主義的な崇高な精神は、世界市民的な思想に通じるものであり、普遍性のあるものだと思う。重要なことは、狭量なナショナリズムを排し、国際主義的な精神だ！と声を大にしたい。

## 日本大使の初めての公墓参拝

日本人公墓は、日中国交正常化が成る8年も前、中国国内でも、日本の侵略に対する厳しい世論と、まだ国としての経済的基盤が弱かった時代に中国人によって作られた。この事実だけでも日中関係の歴史に銘記されるべきだが、より刮目すべきは、外国の文化や古い文化、ましてや日本の侵略の記憶も生々しい日本に関わるこのようなモニュメントを、そのまま残すことが許されない文化大革命という逆流の時代を乗り越えて、なおこの公墓が中国人の手によって守り抜かれてきたという事実である。

1995年2月13日、瀋陽総領事館の2人の領事館員が「方正日本人公墓」を訪れ、県政府に200百万円を寄付している。その翌年、現在の我々の会の前身である「ハルビン市方正地区支援交流の会」がODA予算を通じて方正を支援した活動の際、その担当であった外務省技術協力課長は、その仕事が一段落した後、方正公墓を参拝、深々と頭を垂れた。この方には縁戚に残留婦人がいらしたとのことで、個人的な思いがあったようだ。

今年1月10日、中国駐在の宮本雄二大使夫妻は、北京の大使館の島美奈子書記官、そして瀋陽総領事館の鈴木涉・副領事を伴って方正公墓を参拝、県政府に対して、医療、老人ホーム、教育などの面で援助したい旨発言された、と県政府の王偉新・外事僑務弁公室主任が来日時に明らかしてくれた。

宮本大使は残留婦人に対する個人的な関心も強く、ハルビンでは残留孤児を育てた中国人養父に対して記念品を差し上げ謝辞を述べられた。（7頁参照）

1995年の瀋陽領事館員の2人の参拝、翌年の外務省課長の参拝は、形式としては「個人として」の行動だったようだ。しかし宮本大使の訪問は、「公墓の認知」を更に広げる一歩として考えていくべきだろう。

昨秋、南野・元法務大臣が参拝されたことを我々が重要視したのは、大臣経験者が訪問してくれたからというような権威主義的な発想からではない。開拓民たちが追い込まれた悲惨な状況に、敢えて踏み込もうともしない政治家が多い中、政府の中枢を担った人がたとえ個人的な思いで参拝されようとも、我々はその行動を素直に評価したいと思う。

朝日新聞瀋陽支局長の古谷浩一さんは、「福田さん、旧満州に来てみませんか」という記事を書いた（会報5号参照）。政府の最高責任者が参拝し、国策によって棄民せざるを得なかつた公墓に眠る人々に頭を下げた時、誰よりも喜ぶのは、無念の涙をのんで逝った公墓に眠る人々、その隣に立つ養父母公墓に眠る人たち、そして帰国した残留婦人と孤児、その家族たちだろう。

そのことは、日本が、初めて国家としてのいわば「品格」を取り戻すことに繋がり、同時に、日中間の暗い歴史と狭量なナショナリズムを超えて、共に世界市民社会を創造していくことの必要性を示唆する、大きな一步になると思うのだ。

## 方正テレビ局取材に来日

去る3月4日(火)、方正県人民政府外事僕務弁公室・主任の王偉新さん一行が来日した。今回の訪日目的は、方正県と日本との交流を、ビデオ映像に撮っておこうという趣旨だったようである。一行のメンバーは、方正県常務委員で宣伝部長の王恩庫さん、方正県放送テレビ局長の李春峰さん、それに方正テレビ局女性ディレクターの張曉丹さん、それに通訳の趙会君さんである。

王偉新さんは、外事弁公室・主任ということもあって、日本の方にもなじみのある人だ。通訳の趙さんは、大類が昨年の9月末に方正に訪れた時にも通訳としてお会いした方である。その折りは、千葉県にいる両親の元を離れて当分、方正の親戚の所に滞在し、今後どうするか考えているところだというお話だった。残留婦人の三世、方正出身の新しい世代である。

午前9時に来訪された一行をお迎えした日本側は、方正県に残留された石原政子さん、野崎美佐子さん、方正公墓と残留婦人を取り続けている記録映画監督の羽田澄子さん、残留婦人の二世である武田正志さん、それに事務局から木村直美、奥村正雄、藤井正義、大類善啓が出席。それぞれ意見交換の後、すぐに、それぞれが方正テレビ局の取材を受けた。

その後、ディレクターの張曉丹さんは午後、方正日本人公墓の建立を願い出た松田ちゑさんを取材すべく、奥村さんの案内で、板橋に住む松田さん宅を訪問、取材を行った。現在のところ、この記録が方正テレビの番組としていつ放送されかは未定だ。いずれ番組として放送される場合は、改めて詳細を報告したい。(啓)

### ■ 松田ちゑさん取材の現場

都営地下鉄・神保町駅から西高島平行きに乗ったのは、ディレクター兼カメラマンの張曉丹さんと通訳の趙会君さん。都営住宅4階の部屋で松田さんと息子・崔鳳義さん夫妻が待っていてくれた。この日も松田さんは、いつものように近くにある区の「板橋ふれあい館」へ弁当もちで行っていたのだが、早めに帰ってきたのだった。

「1945年の秋から冬にかけて、方正に避難した開拓団員がたくさん亡くなりましたね。松田さんの娘さんも亡くなられたのだそうですね。それから10年あまりも経って、砲台山麓に開墾に入った松田さんが、そのときの同胞の白骨を見つけて、それが日本人公墓を中国政府が作るきっかけになったそうですね」

張さんはすでによく調べていて、そんな話から松田さんの口をうまく開かせていった。3度の脳梗塞を患った上、高齢になってきて松田さんも重い口ぶりになってきているが、それでも方正からわざわざ話を聞きにくれたというので、顔を紅潮させながら答えていた

ダイニングルームで話を聞きながらカメラを回していた張さんが、松田さんの部屋を見せてもらえるか、と聞くと松田さんは気安くOKして隣の自室へ案内。そのうち部屋から松田さんの歌う声が聞こえてきた。それは松田さんが何年か前、自分で作詞し、「板橋ふれあい館」の館長が作曲してくれた「花の板橋ふれあい館」だ。息をとぎらせながら歌う松田さんをカメラがとらえ続けた。

取材は松田さんから息子の崔さんに移り、彼が自分で書いて製本までやった自伝「東京回想録」の話になった。「ぜひ一冊ほしい」張さんの目が輝いた。だがこの本は3冊しか作らず、崔さんの手元には1冊しか残っていない。そこでこの本の2つの章、母親・松田ちゑさんが、文革期に日本のスパイとして3年半、留置され、夫と息子の崔さんも苦しんだ、生々しい記録、および地元の検察当局が「死刑裁可」間違いなしと踏んで中央政府に出した申請書類が、周恩来総理の即決で無罪放免になったくだりを、奥村が自宅にある本からコピーし、翌日、張さんが千葉市在住の方正帰国者を訪問する折に届けることにした。(正)



左から趙会君、王偉新、王恩庫、李春峰さんら方正県政府一行



左から武田、奥村、大類、羽田、石原、野崎、右端が通訳の趙さん



左から取材する張曉丹さん、右へ木村、武田

## 日本の大天使が初めて方正日本人公墓を参拝

表紙の写真で紹介したが、中国駐在の宮本雄二大使が方正を訪問、日本人公墓に参拝した。このニュースを私たちが知ったのは、1月10日の訪問後、中国の仲間からだった。当初は本当だろうかとの疑念もあり、直接方正県政府の外事弁公室に確認したところ、事実だということがわかった。関係者からも、大使訪問を記事にした黒竜江日報が送られてきた。日本では、このニュースはどのマス媒体も報じなかったようだ。以下、黒竜江日報の記事を紹介する。

黒竜江日報 2008年1月15日付



### 日本驻中国大使访问方正

本报讯（郁风华）1月10日，日本驻中国特命全权大使宫本雄二、日本驻沈阳总领事馆副领事铃木涉等一行四人在省外办副主任王英春的陪同下到方正县参观访问。

宫本雄二大使一行参观了中日友好园林，看望了收养日本遗孤的中国养父、94岁高龄的鲁万富，表达了对他的崇敬之情。方正县委书记孙柏仁、县长佟宝刚会见了宫本雄二大使一行。孙柏仁向日本客人介绍了方正县与日本在特殊历史时期形成的亲缘关系，以及近年来与日本友好往来的情况，并赠送了具有方正特色的剪纸礼品。宫本雄二大使对方正人民收养日本遗留妇女和儿童表达了感激之情，并对方正的中日友好园林建设、与日本的友好交往给予了赞赏。

图为日本大使（左）向收养日本遗孤的中国养父鲁万富赠送礼品。  
卓凤艳摄

### 中国駐在の日本大使が方正を訪問（訳）

1月10日、中国駐在の日本特命全権大使・宮本雄二氏、駐瀋陽総領事館の副領事である鈴木涉氏ら一行四人が、黒竜江省外事弁公室副主任の王英春と共に方正県を訪問した。

宮本雄二大使一行は、中日友好園林を参観後、日本孤児を養育した中国の養父で94歳という高齢の魯万富氏を見舞い、彼に対し彼の崇高な心に感謝の意を表した。方正県委員会書記の孫柏仁氏、県長の佟宝剛氏も宮本雄二大使一行と会見した。孫柏仁氏は、日本のお客様に対して、特殊な歴史時期に形成された方正と日本との親縁関係と、近年来の日本と方正県との友好往来の状況を紹介した。同時に方正の特産品である切り紙の土産を大使に贈った。宮本雄二大使は、日本の残留婦人及び孤児を養育してくれた方正の人々の行為に対して感激の情を表した。また方正の中日友好園林の建設と、日本との友好往来を賞賛した。

写真は、宮本大使（左）が日本の孤児を育てた養父の魯万富氏に御礼の品を贈呈しているところ

## 方正県を訪れた宮本雄二大使夫妻（写真提供 方正県政府外事弁公室）



写真説明 宮本大使夫妻を迎えた県政府首脳ら

左から王偉新（方正県政府外僑弁主任）、劉軍（県委常委、常務副県長）、宮本明子大使夫人、孫柏仁（中共方正县委書記）、宮本大使、王迎春（黒竜江省人民政府外事弁副主任）、佟寶剛（中共方正县委副書記、県政府県長）、劉國軍（黒竜江省外事弁日本処々長）、鄧宏図（中共方正县委副書記）



「中国人養父母公墓」の前で、宮本大使（左）と方正県県長の佟宝剛氏



養父の魯万富さん（着席姿）を中心にして左が大使夫人、右が宮本大使

# 衛藤瀧吉先生を偲ぶ

大類善啓

## 衛藤先生の名前が眼に入った！

「方正友好交流の会」の第2回総会に、旧知の外交界の中国通に講演をお願いすべくお電話したら、すでに約束が入った後だった。たぶん大丈夫だろうと楽観していたので慌てた。仲間に相談する時間的な余裕もなく、慌てて手元の「文春手帳」を取り出し、巻末の寄稿家リストの頁を繰っていった。方正日本人公墓に理解ある方を探すには、当然中国に関心がある人、とりわけ旧満洲にいたことがある人ならいいという思いで名前を見ていくと、衛藤瀧吉先生にぶつかった。

正直にいえば、衛藤先生について知っていることといえば、近現代中国の研究家であること、瀋陽生まれであること。それに亜細亜大学の学長になられてすぐ、一芸一能に秀でていれば入学できるという、偏差値ではなく個性重視の大膽な入学試験を打ち出した人ぐらいの知識しかなかったが、すぐに電話をした。電話口に出られた先生は、幸いにもその日、予定は何もなく、快く「いいですよ」という返事をいただいた。

先生は当日時間通り、中央大学駿河台記念館の会場に来られた。時は2006年3月、小泉首相の靖国神社参拝問題で日中関係が政冷経熱、正常化以後最悪といわれるような時期である。衛藤先生は、淡々と立ったまま講演された。ご高齢でもあるのでお座りにならざると勧めたが、先生は言下に「いいです」といわれた。途中、事務局の木村直美さんも気にされて、私に「お座りになるように勧めたら」と言いに来たが、はつきりと「いいです」という口調を聞いている私は、もう勧める気持ちもなかった。衛藤先生は座ることなく、立って話される方なのだと思った。

事実、死の1ヶ月前、東大駒場での学会に、酸素ボンベを手元において挨拶された姿を、「偲ぶ会」の際ビデオで見たが、司会者が2回、先生にお座りになるよう勧められていたが、断固として拒否され、その姿を見た学会の会場に小さな笑い声が広がっていた。先生の「頑固さ」が偲ばれるようだった。

講演をしていただいてから1年後、今度は会報に原稿をいただきたいとお電話したら、これも快く引き受けいただいた。原稿料など出せる会ではない。私は原稿料のことも口には出さなかつたが、先生も口には出されない。お互い、そんなものはないものと理解されていたと思う。それが「曠野に果てたちちはは」という文章である。衛藤先生は、一度機会があればぜひ方正の日本人公墓に参拝したいと言われながら、残念ながら実現できずに終わった。

## 日本人公墓への思い

昨年の7月ことである。満蒙研究会（仮題）発足のニュースがメールで入ってきた。衛藤先生が『ハルピン郊外「方正日本人公墓」が問い合わせるもの』という題で基調報告する旨、記されている。これはどうしてもせ参じなければと思ってその日、桜美林大学の新宿キャンパスに出向いた。10人ほどが集まる会合だった。

先生はタクシーで新宿まで来られたが、新宿キャンパスといつても高層ビル内の会場がわからず、1時間ほど迷われ、遅れて入って来られた。とてもお疲れの感じで、前にお会いした時より、憔悴されたご様子だった。それでも、30分ほど方正公墓の存在の意義を伝えられた。中国関係者の集まりだったが、ほとんどの人はその公墓について、知る人はいなかった。

そして12月18日朝の訃報記事である。享年84歳。その記事には、葬儀は近親者で済ませ、後日「偲ぶ会」を開くと記してあった。「偲ぶ会」にはぜひ行かねばと思いながら時間が過ぎていった。今年になって3月に開催されると知ったが、とりわけ親しい間柄でない私に通知がくるわけではなく、ぎりぎりになってインターネットで調べて、メールで出席することを先方に伝えた。その際、衛藤先生との関わりなどを記してくれと書いてあったので、「方正の会」のことを記し、添付資料で『星火方正』4号に寄稿していただいた先生の文章を事務局に送った。すると折り返し、「偲ぶ会」の青山学院大学・高木誠一郎先生から、感動的な衛藤先生の文章だから、当日配布する「衛藤瀧吉先生の想い」という小冊子に収録したいがいいかという問い合わせだった。いいも悪いもない、こちらはとても嬉しい気持ちだった。

## 多方面で慕われた衛藤先生

3月1日（土）、学士会館の会場は溢れんばかりの人だった。座る席はすでに満杯で、それを囲むように多くの人たちが立つことになった。定刻ぎりぎりに入った私も当然立った。聞けば 560 名ほどの入場者である。先生を慕う人たちがこれほどいるのだ、という思いだった。入場者全員に配布された資料の封筒には、例の小冊子が入っていた。16 頁ほどのそれには、2007 年 11 月東大駒場で開催された国際共同研究シンポジウム（清末中華民国初期の日中関係史—強調と対立の時代 1840—1931 年）の冒頭の挨拶と基調講演が収録されていた。そしてもう一つ、わが会報に書いていただいた「曠野に果てたちちはは」という文章が収録されていた。

会場には中国関係者など、何人かお知り合いにも会えた。後でわかったが、花岡事件（中国人強制連行事件）の解決に奔走された石飛仁さんや、台湾からはせ参じた台湾独立運動家もいるなど、先生の多彩な人脈を伺わせた。

10 人ほどの方々が衛藤先生を偲んで挨拶された。その最後がアルピニストの野口健さんだった。当日屋久島にいた野口さんの挨拶は、ビデオ収録され披露された。野口さんは、亜細亜大学の「一芸一能」試験で合格された方だ。ある日のこと、南極行きの計画を進めている時に、野口さんはキャンパスで衛藤先生にぶつかった。「おい元気かい」という先生の声に、野口さんは、少しづかち元気がないこと、資金が足りないことを漏らされ、諦めようかと思っていると答えた。先生が、いくら足りないのかと尋ねられたので、野口さんは 200 万円ほどだと言うと、衛藤先生は「200 万円ほどの金で君は夢を捨てるのか」と一喝、すぐ学長室に来いと促された。学長室に出向くと、先生は机の中から 200 万円を出され、これは衛藤基金からだという。野口さんが躊躇していると先生は、君がいらないなら俺が使ってしまうぞと言われ、野口さんは「ありがとうございます」と応えられた。南極探検が実現したエピソードである。

## ロマンティストだった衛藤先生

東大衛藤ゼミ出身で早稲田大学教授の平野健一郎先生は、衛藤先生が若い学生たちに、「松本清張の『断碑』と井上靖の『比良のシャクナゲ』という二つの小説を読め」といわれた話が印象的だった。その理由は明らかにされなかったが、初めて聞く小説だったので、さっそく図書館から取り寄せて読んだ。どちらも短編である。松本清張の『断碑』は、ある考古学者を主人公にした作品である。小学校の代用教員というハンデを乗り越え、必死に学界の中で生きながら夭折した男の一生を描いている。

井上靖の『比良のシャクナゲ』も短編だ。こちらの主人公も「わしは老学徒という言葉が好きだ」という学者が主人公だ。琵琶湖の後方に控える比良の絶景を見ながら、家族と離れ、一徹とも思える学者生活を送った主人公が、自己の人生を回想する内容である。

二つの作品の主人公に共通するのは、周囲におもねらず、清貧を厭わず、かたくなまでに自己の研究に邁進する学者の生きる姿である。衛藤先生は、学者を目指す若い人たちに、この二つの作品を通してアカデミズムの中で生きる姿勢を示唆されたのだろうか。

『断碑』は、『別冊文藝春秋』の昭和 29 年 12 月号に発表された作品である。『比良のシャクナゲ』は、昭和 25 年の作品。衛藤先生がまだ 20 代の後半から 30 代の初めの頃である。先生が研究の傍ら、いわゆるこの種の小説を読まれていたのかと思うと、私などはとても親しみが湧く。

当日参加されていた東大教授の高原明生さんは、年代も若く、直接衛藤先生に教えを受けていないが、ある運営委員会で一緒に仕事をした仲だという。その高原さんからのメールは、「衛藤先生は確かにえぱりんぼでおこりぼんだったものの、大変人間臭い、人間味のある義理と人情を大事にする方だったように思います」というものだった。

駒場時代はともかく卒業後は衛藤先生と付き合いはなかったが、と断った上で、荒井利明さん（滋賀県立大学教授・元北京駐在読売記者）は、「衛藤さんの当時の著書、『無告の民と政治』などは、その題名からして<ロマンチック>な人柄を表していると思います。自分がそうした気質を持っているからこそ、国際政治に関して、よりいっそう<現実的><保守的>な姿勢を保とうと努めたのではないかと思います」というメールをいただいた。

ロマンティストでいながら、学問の世界では徹底的なリアリストとして、時代の風潮におもねらず、文化大革命や学園闘争でも、孤高の姿勢を崩さなかつた先生の姿が浮かんでくるようだ。ここに、『星火方正』4 号の原稿を次頁に再録して、先生のご冥福を祈りたい。

## こうや 曠野に果てたちはは

衛藤 潘吉（東京大学名誉教授）

『就友』と題する小さなパンフレットを庵谷磐さんから10年前に頂いた。庵谷さんは私と同じ奉天一中の先輩、引揚孤児のアフターケアや残留孤児の厚生に身を挺している義人である。『就友』は「中国残留孤児の国籍取得を支援する会」という会の機関誌である。その表紙に短い詩が記してある。かつて別なところでも紹介したが、激しく胸を打ち、忘れられないので、ここでも紹介させて頂く。

「一切合切失つて  
二人の子の手を引き  
三日三晩  
四六時中歩き続け  
五臓  
六腑痛めつけて満洲の  
こうや  
曠野に果てたちはは  
ななころび  
七転  
やおき  
八起の人生でしたが  
見せたい今の幸せぶり  
九天直下超特急で  
十萬億土からこの世へ  
ツアーはありませんか」

半世紀以上むかしのことである。敗戦の混乱の中で、ソ連軍の進撃と空襲。攻撃の目標は軍であろうと民間人であろうと差別なく遠慮会釈なかった。占領されれば、掠奪と暴行は毎日のことで、日本人避難者はただじっとこらえなければならなかつた。そのことを思うと、この短い詩を読んで涙が溢れるのをこらえ得ない。私だって一步誤れば惨憺たる暴虐の犠牲となる運命であったかも知れない。現に私は広島で原爆の襲撃をうけ、数ヶ月髪の毛が抜け落ち、数年間白血球減少症に悩まされた。当放射能の人体に与える影響について種々の臆測があり、結婚のとき人知れず煩悶した。初めて子を持ったとき、ひそかに健常者であるかどうかを疑い続け、以来孫でも生まれる度に一種の恐怖に襲われる。原爆で受けた心の傷は癒しがたい。

同じように、北満からの避難者的心の傷は、なかなか推し測り得ないほど深いに違いない。その難民の集結地方正県！多数の餓死者、凍死者、そして附近の村々では中国人に殺された人も少なくないと聞く。

皆様の努力によって今は、静かな中日友好園林の縁と、豊かな田畠とに囲まれた町となった。そこに周恩来みずから建設、命名を許可した「方正地区日本人公墓」が清潔に保たれていると聞く。そして藤原長作氏の水稻栽培の実践は方正県の名を中国の内外に知らしめることとなった。藤原氏は知る人ぞ知る、後半生を、中国各地で生産力が高く、かつ美味しい寒冷地水稻栽培技術の普及に捧げ尽くした人で、方正はその拠点であった。今、藤原氏亡きのち、藤原式水稻栽培は普及しつつあるという。暗い残酷な歴史の一こまを背負う方正県も、これからは明るい農業集散地として栄えて行くことであろう。

奉天（現在の瀋陽）で生まれ、奉天一中を卒業して内地の上級学校に入った私は、まだ方正県を訪れる機会を得ない。近く是非訪れたいものである。

ところで、方正の物語は単なる敗戦の悲劇の一こまではない。敗戦のとき、中国に取り残された残留孤児たちは、夢にまで見た山河が緑に溢れ、人々は心優しいはずの祖国に帰りたがった。1972年の日中国交正常化以来その道は開け、多くの残留孤児たちが祖国を永住の地と定めた。若くして帰国し得た人々は、日本語の習得も速く、日本の社会文化環境に馴染むことが出来た。しかし40才代、50才代になって帰国した人たちにとっては、日本語は外国語であり、その習得には多大の労力を必要とした。いや勉強しても勉強しても、子供が言葉を覚えるようにはいかなかった。大人になってからの外国語学習は、脳の発達の限度から非常に困難なのである。日本政府の残留孤児担当者はこの課題への心遣いが全くなかった。中途半端な日本語の初步的学習を済ませて世間に放り出された残留孤児には、困難な前途が立ちはだかり、就職にも近隣とのつき合いにも支障が生じた。いや年齢を重ねれば重ねるほど支障は致命的となつた。たまりかねた残留孤児たちは三度国会へ立法的な救済の道を請願したが実現せず、ついに一昨年来裁判に持ち込んで、老齢になってからの生活保障を求めようとしている。私は日本兵や軍属として戦った台湾人には、日本人と同じ軍人年金を与えるべきだと主張してきた。残留孤児も同じである。裁判には呼びかけ人として、その訴訟を励ますとともに、原告側勝訴をひたすら願っている。夢にまで憧れた祖国に見離されると、これら悲劇の残留孤児にとって余りにむごい対応の仕方ではあるまいか。

# 方正行

山村文子

中国を訪れる都度、私は感動と良い思い出を与えてもらう。中でも、1984年1月3日の方正行きは今も鮮明に心に残っている。

方正に日本人公墓があると聞いたのは、その一、二年前。満洲と言っていた頃のことを考えると、信じられないような気持ちだった。この墓は、この辺りに残された日本婦人達が、山野に散らばる同胞の骨を集め供養しておられたのを、人民政府で墓地を整備し墓を造ってくださったと聞いた。お参りし、あわせて中国の方々に感謝したいと思っていた。が、当時はまだ方正に入るには許可が必要だった。

一月二日、前夜、養父母を訪ねた合肥から北京に着いた私たち女性二人は、旅行社の青年と北京空港へ。飛行機に乗る間際になって、前夜あづけた私たちのパスポートを会社に置いてきたことがわかった。青年は、必要なのは出国の時ですからと言うが、私たちは外国人、最悪の場合も覚悟し飛行機に乗った。ハルビン空港では、前年おせわになった旅行社の女性が迎えてくださりほっとする。気温はマイナス16度とか。寒さを感じない。女性はパスポートなしに呆れながら、明日の方正行に努力してくださる由。日本出発前にA氏にお願いしていた旅行社への協力の依頼状も届いていて許可が下りそうで安心する。

一月三日、晴天。七時半旅行会社の女性と三人、車で方正県へ。雪も少なく、道路は広く整備されており車は快適に走る。濱県を過ぎる頃から小高い山が遠くに近くに見えはじめ、日本の農村地帯を走っているように錯覚させられる。樹氷がみごとである。十一時すぎ、方正県城着。宿泊は方正県招待所。

昼食後、日本人公墓へ。公墓は県城から少し離れた郊外にあった。近くに落葉松や、ポプラと思われる林があり、雪をかぶって立派な御影石のお墓があった。「故郷日本の山河に似たこの方正の郊外で、どうぞ安らかに眠って下さい」と祈った。中国の方々の話によると、方正県は経済的には恵まれた地ではないと聞いた。その方正県に、唯一の日本人公墓があることに感銘をうける。県城から公墓への道は二十輻余りの雪が積もっていたが、県の方々が道をつけるためジープを走らせてくださり、参道に足跡をつけてくださった。県の方々の好意に感謝しつつお参りした。

夕食は、人民政府のご招待をうける。方正県には日本人が多く残されていること、県城に住むより農村に住む人が多いこと、また、産物の話など聞きながら数々の料理をいただいた。服務員も実に親切で、人々はみな善意に満ちていた。

一月四日、朝油餅と豆乳と豆腐のスープをいただく。午前、残された日本女性八人が訪ねて来られた。その方々の話では、朝食をとっていたら公安局の人が来て、会議があるから集まるよう言わされたとのこと。来てみたらあなた方が居たと喜んでくださる。日本から持参した栗きんとんと日本茶で、日本人十名だけで話がはずんだ。近く日本を訪ねるという方も居られたが、来年ぐらいから日本を訪問することが不可能になるという噂があるとか、届け出ていない孤児も居るとか聞かされる。一度日本を訪ねてみたいこと、また、敗

戦時自分たちを助けてくれた中国の人々の恩を忘れてはならないというのが皆さん気持だった。

私は、敗戦時、長春で、一年の難民生活をした。その間、中国の人々から数々の親切をうけた。ある時、いつもヨーリヤンを買いに行っていた店の女性に、「私は日本人よ。どうしてこんなに親切してくれるの」と聞いたことがある。彼女は怪訝な顔をして、「日本人、中国人はないよ。困ったときお互いさまよ」と言った。方正を訪ねて、改めてこの言葉をおもい出していた。方正の人々の広い心と、人類愛に心から感謝し教えられた旅だった。



集まってくれた残留婦人たち



山村さんが訪れた時は、まだ「中日友好園林」という団体もなく、  
方正公墓が一つあるだけだ（二枚の写真はその当時、山村さんが撮影されたもの）

# 身も心もまる裸

北澤博史

自分の国を守ることであるのなら国民の犠牲はつきものである。戦前の大人们は、國の行いの良し悪しは別として、みんなそういう行動していたようだ。

私が五歳で満州へ連れて行かれた昭和十五年ごろは、戦争のため日本の経済は貧しかったという。戦争に勝って國をよくしよう、そのために、日本は満州を侵略し経済の立て直しをしようと思いついたらしい。

「満州は日本の生命線」とまで言いきった満鉄の総裁、国策として満州の大地に行くのであるからと、軍を信頼し、満州に憧れた日本国民の声。

昭和十年、康徳二年に辛亥革命を起こした孫文は、腐敗しきっていた清王朝の溥儀を紫禁城から追放してしまった。溥儀さんはそのとき天津に逃れた。その時以来、一般市民の生活をしていたと聞く。そこへ日本軍が溥儀さんを訪ねて、満州國を造りませんかという、願ってもない提案に溥儀さんは同意した。そして紫禁城に戻り、復辟をはたすためでもあったのだが、日本は侵略者でないことを外に宣伝しながら、満州國を建立し、その全土を植民地にする思惑があった。

日本は、満州國の皇帝に溥儀さんを即位させた。溥儀は、皇帝とは名ばかり、傀儡政権のもとで、日本の国策に利用されているだけだった。そればかりか中国は、国民党軍、奉天軍、蒙古軍、共産党軍などと内戦状態にあり、国民の士気は乱れていた。あるとき日本の某大学で医学を学んでいた魯迅さんは、中国の映画を見て気づいたという。医者になって一人の病人を治すより、作家になって十億の民の精神の治療の方が大切と考え、国に戻って文筆活動を始めた話は有名だ。

日本軍部の手による奉天軍の張作霖爆殺事件以来、日本軍は信頼を失い、西安においては、蒋介石の軍門に降った張作霖の子息、張学良が蒋介石を軟禁、反乱を起こした。それを知った共産党の周恩来が西安に飛んだ。西安事件である。周恩来は張学良を説得し、お互いに内戦を止めて、国家統一のため、日本軍と戦うことになる。抗日戦である。

日本は、治安の悪い中国東北部・満州へ食糧増産、祖国防衛といって、武装開拓移民を送り込んで行った。農地は現地農民のものを奪い、地主を小作人として雇い入れた開拓地もあった。私が物心のついたころ、中国人は米を食べない民族だと思っていた。そんなある日、父に向かって、「お父さん、中国人って人間?」と聞くと、「そうだよ、立派な国の民族だよ」と言った。どこの国の民族なんだろうかと、わからないことが多かった。

昭和十九年、私は小学校四年生だった。上には高等科一年生と小学校五年生の二人の姉に、下には一年生と、五歳と二歳の弟三人の六人姉弟だった。母はこの年の秋になって、体調が悪くなり、四キロほど離れている学校近くの診療所に入院することになった。

母のいない家は、急に暗くて侘びしげな村の一軒家だと周囲の人から見られるようになり、同情の言葉も聞かされるようになっていくのが辛かった。

そのころの学校の授業時といえば軍歌ばかりで、団員の出征を見送るたびに、学童に涙の絶える日はなかった。

昭和二十年の四月、野原には青草の芽が一面目立つようになり、ナズナ、ミツバなどの摘み草の季節がやってきた。母は一目、澄みきった春の景色を眺めたかったと思ったようだが、願いもむなしく三十四歳でこの世を去ってしまった。さぞかし無念だったと思う。野良仕事の経験もなかったが、満州に行けば王道の道がひらけると思ったのだ。

戦況の悪化とともに兵役年齢が十五歳以上、四十五歳となった。父にも赤紙が来るのはないか。六人の子供を見つめ、不安な日々を過ごしているうち、七月に赤紙の召集令状がきた。軍では厳しい捷を守らなければならない。

開拓移民には、主婦、老人、子供たちでは役に立たない戦場の予感がしてきたのである。ソ満国境周辺に配置されている開拓民に対して、満州はお前たちが守れと言われ、留守家族の主婦には、国防婦人会なるものを結成し、竹槍の訓練が強要されるようになった。

八月になった。ソ連軍が攻めてくるから村から避難することになった、と親戚のおばさんが言ってきた。戦争に負けたとは言わなかった。

戦争が終わって、わたくしたちが内地に帰る日がやってきた。戦地に行った父も帰ってくるかも知れない。姉弟は期待して待っていた。

翌朝、村を出るため道路に出て学校の方を見ると、すごい勢いで火の手が上がっているのが見えた。電話も通じない。人のざわめき声が聞こえて来た。団全員は集合場所へ急いだ。

襲撃、略奪、自殺者がいる。開拓団の本部や学校の男子職員はソ連に連行されたらしい。難民となって一週間も経たないうちに、大人達の態度が豹変していくのを見た。頼りにしていたおばさんも行方不明になってしまった。戦争に負けたということは国籍のない民族になったことになる。

日本に帰るために、ある団はハルピンをめざし、われわれの団は関東軍の駐屯地のある松花江をめざして歩き始めた。途中、山へ避難し、自決した団員も二百名を超える。

神国と教えられた日本人の姿は無惨にも地獄に落ちたのだ。五族協和、日、満、蒙、朝、漢とはいってどこから出た話だったのか、五十六種族も民族を持っている中国である。

五族さえ抗日の案内役をつとめた、最悪の敵に変貌した。何がそうさせたのか。武力によって奪った農地だからである。方正県にある松花江に引き揚げ船が来るかもしれない。軍が守ってくれるかも知れない。難民の願いは軍部にとどくどころか、裏切られていたのに気づくべきだったが、どうにもならない。飢餓と伝染病におかされて死んで行くだけ。生き恥をさらすな、お国のために死んで行くのは国民の美德だと思わされていたが、収容所の難民は、生きて祖国に帰りたいという望みを捨てきれず、満州全土から集まってきた。

十月になった。蝉のように黒く痩せ細った弟が死んだときは、一メートルほど地面を掘って筵を掛けて埋葬できたが、その後は、予め予想した死者のためにと、相当広くて深い埋葬用の穴が二カ所用意された。みんな夏服のままだった。厳しい寒さの中、死体は積み重なり、おまけに身ぐるみはがされ、雪吹雪にさらされたままとなつた。収容者八千名、死者五千名と中和鎮の文集に記されている。

それから十数年後、中国人民政府によって罪のない開拓移民家族の慰靈碑が建立された。これは日本残留婦人の願いでもあった。加害者の墓を被害者の国に守らせている。私はこの事実を日本国民に知つてもらうためにこの手記を書いた。

## 酷寒の風 搖るがぬ友好

石 金 楷

2008年1月9日、著名なカメラマン・孫国田さんがハルビン市方正県を訪れ、零下20度という厳寒の中、日本の残留孤児の養父母や日本人公墓などを取材した。

今年53歳の孫国田さんは中国写真家協会の会員であり、大慶市写真家協会の副主席である。この6年来、彼は侵略日本軍の証拠となるものを苦労しながら探し出し、あの忘れることのできない歴史を掘り起こし、記録してきた。彼の足跡はいくつかの省や都市にわたり、記録した人物は東北抗日聯軍の戦士、労働者、虐殺事件の生存者、歴史の証人、慰安婦など200人あまりに及ぶ。彼が撮影した人物で歴史の証人となる老人は、最も若い人でも80歳を過ぎているし、ある人は撮影後まもなく世を去った。彼の言葉を借りるなら、「生きている歴史は、いま一つずつ消えつつある」

私が孫国田さんを知ったのは「生活報」の中の一篇「寛恕の花の種が平和の花を咲かせる」という記事だった。この記事のチーフ記者・夏徳輝の助力で孫国田さんと連絡がとれた。電話で私はハルビン市中国残留孤児養父母会の活動状況を彼に紹介した。これによつて孫国田さんは孤児たちの養父母の取材に大変関心をもたれ、私どもが提供した養父母の情報に大変感謝された。

今年の1月29日、日本の毎日テレビ上海支局の一行3人がハルビンと方正を取材に見えたとき、私たちの招きで孫国田さんも取材に参加された。お会いしたとき私たちは彼に「日本残留孤児の調査研究」、「中国の母親」などの記録と映像資料を差し上げた。彼からは香港大道出版社から出版された彼の写真集をいただいた。日本残留孤児の養父母を取材したとき、孫国田さんは感動して言った。中国の養父母は本当に偉大だ、彼らの恨みに代えて徳を報いるという懐の深さ、民族の恨みを超えた彼らの、この偉大な母性愛は、人の心を洗い清め、震撼させる！かかる老人こそは生きている歴史であり、こうした人たちを掘り起こし、記録に残すことは歴史に対する責任であり、中日の世世代代の友好を発展させ、世界平和を維持する上で、極めて大きな現実的、歴史的な意義を持つものである…

方正県中日友好園林にある日本人公墓、ならびに中国養父母公墓の前で、彼は方正政府外事課の説明を真剣に聞きながら、庭園の情景を余すところなく撮影し続け、零下20度の寒い天気だったにもかかわらず、熱い汗を流しっぱなしだった。これらの資料は大変貴重であり、これは中国政府と人民の崇高なヒューマニズムを体現したものであるし、歴史を忘れず、世界平和を築くために強烈な警告作用を持つものであると述べた。友好園林を出ると車を駆って吉興村の、かつての日本開拓団本部の跡地および伊漢通の港を取材した。白雪に覆われた川面と、かすかに霞む砲台山を見ながら、私たちは中日両国人民の友情がこの白雪のように純潔無垢で、2度と再び戦争、硝煙、死を招くことのないよう、永久平和を心から祈った。

(奥村正雄訳)

(ハルビン市養父母連絡会秘書長)

## —— 方正県日本人公墓の前に立って ——

# 前事不忘 後事之師

小野寺 武男



今年の正月、私たち「偽滿州国平和を探る旅」と名づけた14名の岩手の旅行団は、方正県の「日本人公墓」を墓参してきました。そのことを「方正友好交流の会」の大類さんにメールで報告したところ、会の機関紙に投稿してほしいとの依頼を受けましたので、單なる経過報告程度にしかならないと思いますがご報告申し上げます。

### はじめに

私は、長いこと教師をしてきて、自分なりに「平和の尊さ」について考える機会を子どもたちに提供してきました。でも、何かが足りないという意識が常にありました。それは、戦争の悲惨さ、理不尽さを考え合うときに使った資料が、主に「広島・長崎」や「東京大空襲」などの被害者の立場からのものが多かったからかもしれないという反省からでした。そこで私は、「太平洋戦争の中で日本はアジアの人たちに何をしてきたのか」という加害の事実を、自分の目で、体で、頭で触れて見たいと考えるようになり、南京、ベトナム、韓国などを訪れて、自ら学び直す努力をしてきました。この旅を続ける中で、15年戦争の勃発の地「旧満州国(偽満州国)」をぜひ調べてみたいと、2005年の1月に中国東北部を旅してみました。

そこで学んだことは、私には大きなショックでした。ショックといえばマイナスのイメージが伴いますが、逆に「一筋の光」を見た思いがしたのです。この光が、もっと調べたいという強い想いを呼び起こし、今年の1月に、再び満州の地へ足を向けさせる力となったのです。

中国東北部には、「人間はここまで鬼になれるものか」という戦争の負の遺産と、「平和を実現していくには何が大事か」という人間の尊厳について考えさせられる輝かしい遺産の両方がありました。そのどちらも「教育」が創り上げた遺産であることに想いをはせずにいられませんでした。

私は、2005年に続いて、再び「偽満州国の地」を訪れたのは、二つの理由からでした。

一つには、前回訪れたとき撫順戦犯管理所の所長の候桂花さんに「撫順の奇蹟」と言われるこの地であった事実を、ぜひ日本の多くの人たちに伝えてください。できれば若い人たちを連れてまた訪ねてきてください」と言われ、その約束を果たしたいと願い続けてきました。もう一つは、前回の旅で時間と経費不足で調べられなかった、黒龍江省で続発している「毒ガス訴訟の問題」と「満蒙開拓団・残留孤児の足跡」のことを、機会があれば現地で学んでみたいという強い願いがあったからです。

その満蒙開拓団のことを調べているときに、方正県の「日本人公墓」のことを探してはじめて知りました。そのきっかけは、昨年の秋ころに(正確に日付は記録しなかったので不明)朝日新聞のコラム記事でした。ぜひ訪れてみたいと、今回の旅の行程に組み込みました。もう一つ「方正」という地名は、私にとっては懐かしい響きがありました。それは、2005年の時の訪中は、今回のように団を構成してのものではなく、たった二人で行き当たりばったりの冒険的な旅でした。そのとき哈爾濱を案内してもらった方(岩手にお嫁に来られた「小野寺さん」という姓の方)の出身地だったからです。そのとき夜遅く着いた私たちを「小野寺さん」は少しかぜぎみなのに迎えてくださったのですが、方正県がどこにあるのかも知らない私は、夜遅く長距離バスで着いた私たちを迎えてくださったことにだけ感謝をしただけでした。帰国後に調べてび

っくりして、改めて御礼を申し上げたことがあったのです。そんな思いが、新聞を読んだとき「ぜひ方正県へ」という強い思いを抱かせたのでした。

## 1 日本人公墓の前に立って

方正県を訪れたのは1月6日でした。バスが佳木斯への高速道路を下りたのは10時ころでした。方正の街を抜けて、いよいよ日本人公墓へ後2kmくらいに差し掛かったときです。バスが突然止ましたのです。何事かと思って降りてみると、公墓への道が高速道路の下をくぐるのですが、その高架が低くて中型のバスなのに通り抜け出来ないので。歩いて行こうと意気込む人たちもいたのですが、結局、街からワゴン車を呼んで、一台の車にガイドの人と運転手を含めれば17人の人がすし詰めとなり、大騒ぎしながら中日友好園林に着きました。

友好園林は水田地帯の広がる一角にあり、小さいですが整備されたきれいな公園でした。その雰囲気が車の中で大はしゃぎしてきた私たちを一瞬のうちに過去の世界にいざなってくれたようです。だれもがその雰囲気を全身で感じているようでした。その静けさから呼び覚ましてくれるよう犬の鳴き声が響き、その子犬と一緒に管理人さんが笑顔で迎えてくださいました。

ゲートをくぐって中に入ると赤レンガが敷き詰められた広場が私たちを迎えてくれたのですが、2、3cmの雪がきれいに掃き取られていました。管理人さんが毎日のように掃き清めていただいているとの話に、胸がキュンと引き締められました。

日本人公墓は、入り口から100mほど唐松林の小道を進んだところに建っていました。公墓は逆光のため黒いシルエットで私たちに次第に大きくなっていました。公墓まで進む間、踏みしめる雪の軽やかな音だけが響いていました。小鳥のさえずりだけが聞こえる静けさの中に、右に方正日本人公墓、左に麻山事件の犠牲者の墓が並んで私たちを迎えてくれました。

そのお墓の前で、準備してきた花を顕花し黙祷を捧げた後、全員で、ふるさと日本への無事な帰国を夢見ながら無念にもこの地で命を落とされた御靈と、赤御影石で見事な墓を建立してくれた中国の人々、日々この墓を守ってくださっている現地の人々に思いをはせながら「ふるさと」を合唱しました。私はビデオを撮っていましたが、そのファインダーの中には、涙を流しながら歌い続ける旅行団の人たちの姿がありました。

### (1) 参加者の記録から

帰国後に作成した『旅の記録誌』に記されていた記録から、「日本人公墓」の部分について書かれた一部を紹介します。(一部の切り取りのため、文脈がつながらない部分もありますが)

◇ 方正日本人公墓には、1日がかりで訪れました。5000人もの開拓民が葬られた場所でした。献花後、参加者全員で「ふるさと」を合唱し、黙祷を行いました。零下30度～40度の厳寒の中で飢えと凍えで亡くなり、日本に帰ることが出来なかつた事実を目の前にして胸が押しつぶされ、言葉がなく、涙があふれる自分がいました。(豊巻松美)

◇ 4日目は方正県にある日本人公墓にお参り。終戦時に日本軍からも見捨てられ、ソ連軍に追われ、日本に引き上げようとしたものの、それがかなわぬ満州の地で亡くなった開拓団約5000の方々の墓である。雪解けの平原に散らばっていた遺骨を中国の人が拾い集めてくださったそうであり、またソ連軍に



中日友好園林の入り口の門



公墓に献花する旅行団

追いつめられて自決した麻山事件の犠牲者約500人の遺骨も納めた公墓もある。少し離れたところに、日本人の子どもを引き取ってくれた中国人養父母の墓も並んで建っていた。その、門扉に「養育之恩」「永世不忘」と書かれてあった。

私の父の姉も満州から引き上げてきたということだが、満足な食料もないままに凍てつく満州平原を歩き続ける途中、弱って死んでいった背中の赤子を埋めようにも大地は凍っていて穴が掘れないため、そ

っと地面に亡骸を置いてその場を去るしかなかったという話を、たった一度だけ聞いたことを思い出した。今、まだこの平原のどこかを、日本に帰りたい一心で迷っている人がいるような気がする。公墓の前に私たちは献花し、ただただ合掌し、祈るしかなかった。どんなにか日本に帰りたかっただろうか…「ふるさと」の歌を泣きながら捧げた。(東野 正)

◇ 加害について学びに行ったのですが、方正県の日本人公墓の前に立つと、以前、他人事のように聞いた夫の伯父さんの妻(伯母)の話。医者だった彼(伯父)は、妻子と「後で追いつくから」と言って別れた。その後の消息は無く、逃げながら夫を待ったが会うことはなく、我が子も死なせてしまった。やつとの思いで帰国した伯母。最愛の夫と子どもを亡くした彼女は、今も心に痛みを抱えて消えない。小さい命と伯父も、あの方正県のどこかに眠っているのかもしれない、涙が止まりませんでした。(鈴木久美子)

◇ それにしても、方正県のお墓をお参りして、国策にのって移民してきた人々がたくさん力つきて亡くなつたことを思うと胸がつきました。

帰宅して読んだ朝日新聞の記事に、女たちが婦人部を結成し、初めは災害などの被災者への援助活動だったものが、正義と平和の名の下に徐々に戦争に協力していく様子が書かれていました。

満州への出兵も正義のためと容認し、満州への開拓団は日本にとって必要なことで、その半分は女性であるべきだと、積極的に動いたとありました。

戦争は常に正義と平和の言葉で押し進められ、それに踊らされて女たちが積極的に動き、多くの死者と残留孤児を生んだことに、やりきれなさを覚えました。(沼田純子)

◇ 今回の旅行を計画していた昨年の秋、朝日新聞に、中国に唯一の、日本人公墓が方正県にあることがコラムになって報じられた。「参拝する人もあまりいないけれど、落ち葉がきちんと掃かれていて……、知らない人も多いのではないか、少し遠いけれど日本人はそこへ足を伸ばしてみてはどうか」という記事だった。

「ほうせいけん」は、私がまだ子どもだったころ、NHKのラジオで夕方4時50分から毎日放送があった「尋ね人の時間」でよく耳にした地名だった。旧満州がなんとなくなつかしいように思うのは、父が赴いた戦地だったからではなく、その小さい脳に繰り返し刻み込まれた地名と、肉親、知人を尋ねる人々の必死の思いが読み上げられたからだったのかもと思う。父は、私が生まれて間もなく出征した。終戦まで一年もなかった。幸い生還した父は、戦争のことは一言も語らないで逝ってしまった。よっぽど深い傷を心に負ってきたのだと思う。父の口から戦争のことを聞くことができなかつたことは残念なことだけど、一言も語れなかつたことが眞実なのかもしれない。しかし、私たちは知らなければならぬ。知らされなければならぬ。知ろうとしなければならないと思う。

方正の中日友好園林の日本人公墓には、5000柱の遺骨が大きい山に、そして小さい山には500柱の遺骨がまつられていた。日本政府でなく中国政府がつくってくれたお墓だ。参道の3cmほどの積雪はきちんと掃かれていた。それは、きのうや今日、私たちの参拝を知



黙祷をささげる旅行団

つて急いで掃き清めたという風ではなかった。ありがたいなあと思った。そして、この厳寒の地に望郷の思い果てなく息絶えた民間人達の心を思い涙した。日本政府は何をしているのかと思った。この遺骨をふるさと日本に帰国させることはできないものなのだろうか、・・・・と。南方戦地にも今だに野ざらしにされたままのたくさんの兵士の骸があるそうだ。(小野寺和子)

まだ記録はありますが、全員が日本人公墓の前に立ち、この公墓に眠る御靈と、建立にかかわられた多くの人たちの思いをしっかりと受け止めて帰国したことを報告したいと思います。

### (2) 藤原長作さんについて

日本人公墓から離ますが、私たちにとって方正県はもう一つ大きな追求課題を与えてくれた地でもありました。

それは、中日友好園林の小さな資料館に掲示されていた「藤原長作」氏にかかわることです。藤原長作さんは、私たちと同郷の岩手県沢内村の人です。緯度で見れば樺太の南端に位置するこの中国東北部の方正県で「米づくり」を指導されて成功を収めた方です。

私は現在、この沢内村で「ポラン農業小学校」という学校を開催しているスタッフの一人で、藤原長作さんの話は漠然と知ってはいたのですが、この方正県でその指導に当たられていたことを知らなかつたのです。ガイドの王さんが「この地方のお米は大変有名で、中国の人たちにも好まれています」と話されていましたが、こここの資料館の展示物を見ると、藤原長作さんは中国では国賓並みの扱いをされていることをはじめて知りました。資料館の一角に戒名が刻まれた墓標が展示されていましたが、帰国後調べてみると、この墓標は沢内村の人たちが日本から運んだものであることも知りました。「飛行機の荷物として扱ってもらえるかどうか心配したけど、うまくいきましたよ」と語ってくれたのは、この墓標に戒名が刻まれている佐々木覓さんという存命の方でした。沢内村といえば、日本で始めて老人医療無料化を実施した「命を大切にする行政」で有名な村です。その精神は、こういうところにも及んでいたことを知り感銘を受けました。

日本人公墓は、中国側が示してくれた日中友好のシンボルの一つであるとしたら、藤原長作さんや、沢内村の方々がこの寒冷の地で育つ稻作の技術指導をされたことは、中国と日本の友好を民間レベルで進められた証であるといえるのではないかでしょうか。この地は、正に地名の通り「正しく友好関係の結び方の方向」を示しているシンボルがある貴重な地ではないかと思うのです。

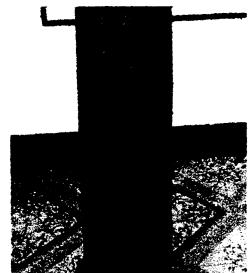
## 2 中日友好樓を訪ねて

### (1) 中日友好樓

今回の旅で「残留」孤児の問題にかかる訪問地として、「中日友好樓」を訪ねて今年86歳になられた「崔」おばあさんに逢うことができました。育てられた孤児の息子さんはすでに帰国されて、現在は、娘さんの家族と一緒に暮らしておられました。

この中日友好樓は、残留孤児の養父母の方々のために、日本の篤志家の方の寄付で長春市に住む養父母の方々が生活する場所として建設されもので、土地は「公地」だといいます。それにも大きな建物で、建設当初は30家族以上の方が入居されていたらしいのですが、亡くなられたり、別に入居できる場所を得て越されたりして、現在は3家族だけの入居だといいます。

こういう施設は中国東北部でここだけというのですから、他の地域の養父母の方々はこの恩恵にあずか



資料館の墓標



長春の中日友好樓

ることができないことがあります。民間の行動に任せることなく、むしろ積極的に日本政府が取り組まなければならない事業ではないでしょうか。

## (2) 崔おばあさんの話に

崔さんが孤児を引き取られたのは、自分には子どもがなく、ご主人は保険会社の役員のようなことをな



さっていたとの事なので、もしかしたら日系の人たちとのつながりが深かったのかもしれません。長春の「避難所」に出向いて、三人兄弟の一番下の男の子を引き取ったとの話。

崔さんの場合はそうでもなかったようですが、日本人の子どもということが分かると、周りからいじめられたりすることが多かったといいます。日本人の

86歳の養母の崔さん 子どもということが分からないように、一度引き取った先から再び別の家庭に引き取られるケースも少なくなかったといいます。崔さんの引き取られた子どもさんは、周りからのいじめも跳ね返すほどの元気者で、勉強もしないでよく問題を起こす、俗に言うツッパリタイプの生活をしていました。「じゃ、放蕩息子ですね」と言うと笑っていましたが、少なくない孤児たちは、こうした生き方をするしかなかったのかもしれないと考えさせられました。

「せっかく育てたのに日本に帰国してしまって寂しくないですか」と聞くと、「あなたたちがこうして逢いに来てくれるの、みなさんが私の子どもだと思っています」と笑顔で話しておられました。でも、それは本音か、それとも社交辞令か?その笑顔の中に寂しさを感じたのは私だけでしょうか。また、「日本人が中国でひどいことをたくさんしたのではないか」の問いに、「私は中国人街に住んでいたので、そういうことは良くわからない」という言い方にも、訪ねていった私たちへの心遣いのようなものを感じたのは私だけでしょうか。我が子として育てた子が、いかに放蕩息子だったにしても、手元を離れて遠い日本に帰り、日常的に顔を見ることもできない現実を「さみしくない」などと言えるはずがありません。終戦後しばらくたっても、こうした人間として当然の幸せさえも奪い去る戦争の「負の遺産」が深い影を落としていることを、私は、明るく振舞おうとする崔さんの姿に重ねて、胸が詰まる思いで聴いていました。

## (3) 「残留」という言葉に

私は「残留」という言葉に引っかかりを感じていましたが、今回の旅でさらにその疑問が強くなりました。「残留孤児」という言い方は、日本人が言い出した呼び方です。「残留」には取り残されるという意味もありますが、自分の意思で留まることも「残留する」と言います。「残留婦人」と呼ばれる方も居られるのですが、この「婦人」は大人ですから、いろいろな事情があって、自分の意思で残るか、残らざるを得ない何かをかかえて残られたのだと思います。そういう意味では、「残留」と言い方もできるかもしれません。しかし、訳も分からぬ子どもが自分の意思で残ることを選択した例は皆無といっていいのではないでしょうか。それをどちらとも取れる広い意味で「残留」孤児と表現することは正しくないと思うのです。この話をしたら「棄民」という言い方もされている」と誰かが教えてくれましたが、日本の報道で「棄民」という言い方をしていることを、私は一度も聞いたことがありません。私は、「残留」ではなく「遺棄」という表現のほうが正しいのではないかと思うのです。誰が、どんな理由から「残留」と言いだしたのでしょうか。言葉はある種の力を持ちます。正しい表現にしないと大きな問題を起こすことにも少なくないのです。いずれ政治色の強い命名だとは思うのですが、それにしても「残留」はあまりにも事実を正しく表現していない言葉ではないかと、さらに疑問を持ちました。

黒龍江省科学院の高先生と話していたとき「残留婦人のことにも是非関心を寄せて欲しい」と言われました。残留孤児だけに目を向けていた自分の浅はかさを感じさせられました。「大地の子」でも、主人公の

妹が、病身を押して夫の母親のために畠仕事をしているシーンがあったことを思い出します。自分の意思で残留する、せざるを得ない道に追い込まれた人たちがたくさん居たことを思うとき、今度は、残留婦人の人たちや、その家族の方とぜひお会いしてみたいと強く思いました。

### 終わりに

私たち旅行団は、哈爾濱、長春、瀋陽、撫順を訪れて、日本にはあまり報じられていないたくさんの事実を知ることが出来ました。もっと多くのことを書きたいのですが、今回は「満蒙開拓団、残留孤児問題」の一部についてだけの報告に留めます。

お会いした中国の方たちが、異口同音に話されたことに「事実をしっかりと見つめ、そこで何があったのかを認識し、そのことを次の世代にしっかりとつなげてこそ、明るい未来がある」ということだったよう思います。私は中国東北部を訪れるたびに「知らないことも罪だ」と感じさせられますが、加えて私は、過去において教師として子どもたちに「知らせてこなかった罪」を思います。教育現場を退いたとはいえ、この言葉の意味をかみしめ、これからできることをしていかなければと強く思った旅でもありました。

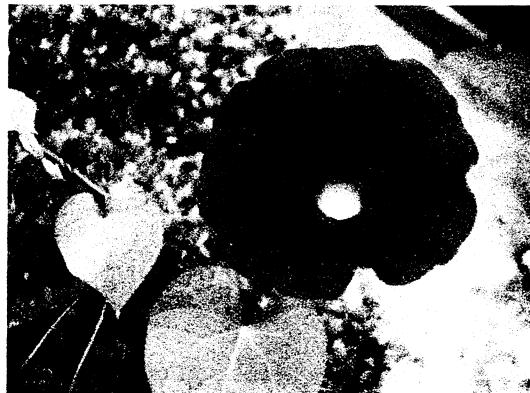
私たち旅行団は、帰国後に話し合いを持ち、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会：岩手」を立ち上げることを決定しました。方正県のこと、平頂山のこと、撫順戦犯管理所のこと・・・、まだまだ正しく報じられていない事実を、多くの日本人たちへ、そして後世に伝えていく活動を小さな力ですが積み重ねていきたいと思っております。

方正友好交流の会の皆様とも、今後いろいろな連絡を取り合いながら、日中友好、そして世界平和のために努力していく所存です。これからもよろしくご指導、ご支援をいただければ幸いです。

[撫順の奇蹟を受け継ぐ会：岩手 事務局]



平頂山殉難者遺骨館に献花する旅行団



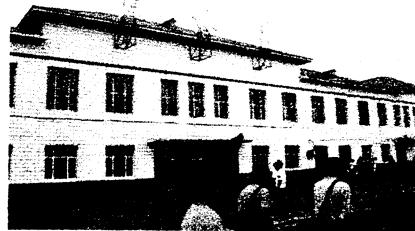
撫順戦犯管理所の中庭に咲く「赦しの花」

# 新潟第7次清和開拓団勤労奉仕隊記録の発掘 —殉難者への慰靈の心をこめて—

高橋 健男

## 1 宝清事件と佐渡開拓団事件

第7次清和開拓団は新潟県送出の開拓団で、旧東安省虎林県に入植した。<sup>せいわ</sup>「1938（昭和13）年2月、先遣隊入植。猛吹雪を冒して宿舎の建設、燃料収集に血の出るような苦心を続け、翌昭和14年、本隊の入植を見るに至る。団員はすべて新潟県人で戸数約200、人口約600、所有土地面積約4,300町歩」と、梅川勝衛団長（元中蒲原郡荻川村村長、新潟市、故人）が勤労奉仕隊に紹介していた。

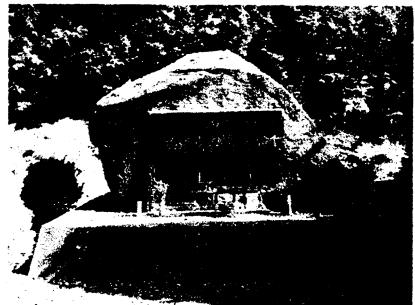


虎林駅舎

清和開拓団は満州開拓史上の「北満一の悲劇」に遭遇した開拓団であった。ソ連軍が満州に侵攻した昭和20年8月9日、ソ満国境近くに入植していた清和開拓団は、即時避難の態勢に入らざるを得なかった。避難途中の8月13日、<sup>ほうせい</sup>宝清街城門外で満軍・匪賊の襲撃を受け、約180名を失った。「宝清事件」といわれる（注：日本語では同音で読める宝清は「ホウセイ」と、方正は「ホウマサ」と讀んだとされる）。

その後完達領越えてたどり着いた佐渡開拓団（新潟県第10次）跡では、ソ連軍の襲撃でさらに370名を失う。佐渡開拓団跡では長野県送出開拓団など約3,000名の避難民が一時滞在していたのだが、8月27日、抵抗した避難民に対しソ連兵が攻撃を加え、戦死・自決者約2,000名を出した。佐渡開拓団跡事件は、<sup>まさん</sup>麻山事件や葛根廟事件と共に、多大な犠牲者を出した満州開拓民三大殉難事件のひとつである。

『満洲開拓史』には「清和開拓団の終戦時の在籍者数848人（うち応召146人）、死亡297人、未帰還293人、帰還58人」とある。ここでの殉難者記録は少ないが、新潟県庁所蔵の「清和開拓団実態調査表」では、「在団総数916人、大人462人（男247、女215、ただし男125は応召中）、子供454人（男264、女190）」とあり、老幼婦女子中心の避難集団の犠牲者は優に450人を超え、帰還した人は避難集団のわずか50人に過ぎなかつたとされる。



清和開拓団殉難者供養之碑

その殉難者を祭る「清和開拓団殉難者供養之碑」が北海道上川郡下川町渓和<sup>けいわ</sup>の高台に建つ。碑文は裏面に長文の追悼の辞を掲げ、避難・殉難の状況を次のように刻む。

逃避行中虐殺、暴行、掠奪を悉にされ、自ら生命を処理するもの、餓死するもの、あるいは凍死するもの、病死するもの、その様相は正に此の世のものとは思われず、言語想像を絶する凄惨悲愴、只々死者の冥福を祈るのみ。かかる難行艱苦のすえ故國の土を踏んだもの僅かに50名。その後さらに病死20名を数え、生存者ただの30名

となる。

その生存者のうち 13 名が戦後開拓に渓和の山に入植したのだった。現在は広大な牧草地と化しているその地は、入植時は樹木、熊笹、瓦礫、酸性土壌の荒地であった。入植者たちは数年間の艱難辛苦を経て定着し、1977（昭和 52）年に高さ 2 メートル、幅約 3.5 メートルの立派な慰靈碑を建立した。遠く新潟の地から離れたこの地に慰靈碑を建立した入植者たちの想いを、殉難者供養之碑近くで酪農を営む元清和開拓団員、押田九十九・キヨミ夫妻や元開拓団家族の志田英男さんが語ってくれた。

## 2 「満州建設勤労奉仕隊」と昭和 16 年度奉仕隊の記録

「満州建設勤労奉仕隊」は 1939（昭和 14）年、国において「東亜建設勤労奉仕隊派遣に関する件」が議され、「青少年義勇軍の成功によって青年層を更に一層広範に動員して、満州の無限の沃野、無数の建設諸工作に向かわしめ、青年層はもちろん国民全般に大陸認識を深めしめん」と企画され、実施に移されたものである。この計画の前後には興亜学生勤労報国隊や各県の報国農場への勤労奉仕隊などの派遣もあった。

満州建設勤労奉仕隊の目的は、その『綱領』に次のように示されている。

現下に於ける満州建設の重要性に鑑み、日満共同防衛の見地に基づき、満州における食糧・飼料の増産、日本に対する豊富且つ低廉なる飼料の供給並びに国防建設に寄与する為、銃後青年を動員し満州建設勤労奉仕隊を編成せしめ、主として国境地帯及びその背後地並びに開拓地等に於いて土木、農耕その他の建設事業に勤労奉仕せしむると共に、併せて日本農村問題等特に飼料問題解決の一端に資す。

勤労奉仕隊にはまた別に、「勤労奉仕実践を通じ青年の訓練及び大陸認識を与え、以って日本青年の報国精神を昂揚するを主眼とし、訓練勤労一体の実を擧ぐるものとす」という目的もあった。勤労奉仕経験の後青少年義勇軍や開拓団に参加した青年たちもいたし、勤労奉仕経験談を各市町村の満州開拓講演会で多くの人たちに語った青年たちもいた。

新潟県上越市柿崎区在住の野田良雄さん（会員、83歳）は、青年学校を終了した 17 歳のとき、1941（昭和 16）年 6 月 9 日から 8 月 23 日まで、清和開拓団への勤労奉仕隊の一員として渡満した。指導者（学校教員）2 名のもとに野田さんを含め 17 歳から 24 歳までの 23 名が、県内各所から隊員として参加した。昭和 16 年度は全国から 1 万 3,000 人の青年たちが勤労奉仕隊として渡満した。

「我等勤労奉仕隊は、皇祖の神勅を奉じ、協心戮力身を挺して興亜の天業に追進し、神明に誓って天皇陛下の大御心に副い奉つらん事を期す」と宣誓する勤労奉仕隊に関し、昭和 16 年度版『満洲開拓年鑑』は、渡満船上に鈴なりになった青年たちの写真を添えつつ次のように記す。

現地認識による対満大量移住の機縁を国民各層に深むる一方、直接には食糧・飼料の増産に寄与をなす彼等青少年学徒の奉仕訓練の意義はまことに重大なものがある。

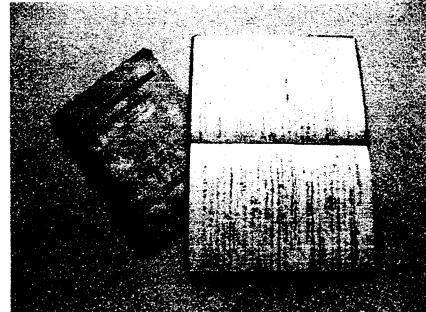
さらにまた、彼等自らの陶冶の上にこそ大陸日本の発展はかかっていると言おう。民族の先覚者たちがつくり育てゆく開拓農村の印象は、彼らの内なる心に創造の喜びを燃焼させずにはおくまい。祖国は彼らのうちに、また彼らをつつみ、常に彼らとともににある。大陸への行進譜を奏でて、進め若人よ。

野田良雄さんは自宅出発から帰国までの約 100 日間、克明な日記を記録していた。野田さんとの出会いは 3 年前、新潟県満州開拓民殉難者慰靈祭でのことであった。終了後の宴席で清和開拓団で勤労奉仕をしたこと、その記録ノートがあることを知る。野田さんは勤労奉仕から帰国した翌年、体調を崩ししばらく療養した。その間に丹念に記録していた日誌を別のノートに清書していた。

現在、当時の手紙・葉書と共にノートが二冊と勤労奉仕隊アルバムが自宅に残る。

その『満州建設勤労奉仕隊点描記』を拝見すると、そこには勤労奉仕の日々の奉仕作業、青年らの現地生活の一こま一こまが実に詳細に再現されている。また、勤労奉仕に参じた青年の新鮮な目で、昭和 16 年、入植 3 年目の開拓団の人たちの様子もつづられている。

この記録は、満州開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍の記録・手記とは異なる、青少年による現地建設の勤労奉仕隊の実際を詳細に伝えている貴重な史料である。拝見させていただいた私は書き起こしを試み、多少の解説と写真等による説明を加え、新たな項目立てをして編集することを申し出て、2008 年 1 月、野田さんと共に自費出版した。



日記・記録帳原本

### 3 平成 19 年、かつての入植地は

2007 年度の新潟県慰靈訪中団 13 名のうち、野田・高橋を含む 6 名が別動隊として 8 月 1 日、清和開拓団跡地を訪問した。現地は虎林市街から車で約 30 分のところ。かつての清和開拓団購買部の建物は、現在「清和供銷部」としてかつての場所にそのまま立ち、地域住民に日用雑貨を供給している。その建物は虎頭に向かう省道から 100 メートル入ったところにあり、その特定は簡単であった。

一方、広大なかつての清和開拓団部落の一つひとつを特定するのは困難である。私たちは幸いにも昭和 15 年に清和開拓団に勤労奉仕に入った阿部正雄さん（柏崎市、故人）が記録する部落配置図を入手していた。加えて、私が清和開拓団の調査聞き取りで知ることになった岡山市在住の須田まさ枝さん（終戦時 16 歳）から聞き取った概略の配置図がある。須田さんは本部そばの第一部落所属であった。彼女は 20 年前と 2007 年 6 月にかつての自宅跡に立っていた。



かつての清和開拓団購買部

清和供銷部で須田さん提供の現地地図や写真を示して位置を確かめる。供銷部の青年が2カ月前訪問の須田さんを覚えており、本部跡、第一部落、第二部落、清和小学校、食品加工場跡、野田良雄さんが滞在していた第五部落へと案内してくれた。

本部跡と第一部落、清和小学校は、供銷部から省道を5分ほど虎頭方面に走り、省道から1キロ弱の位置にあった。省道はかつての虎林・虎頭線跡で20数キロまっすぐに走る。本部跡に入る地点には旧清和信号所（注：列車交換のために利用され、清和開拓団はここを臨時駅として利用した）のコンクリート礎石が少し残る。

第一部落は村道に沿って一列に家屋が並んでいた。須田まさ枝さん家族の家はその並びの4軒目である。柏崎市出身の船岡清さん（東京都墨田区）はその斜め前、一時臨時の教室に使われていた家に入居していた。20年前には現存していたそれらの家屋は、今は無い。そこは畠地と変わっていた。

私は須田まさ枝さんから「お会いになつたらあげてください」と、かつての須田家隣に住む家族の写真を預かっていた。6月訪問時の数枚の写真である。おばあさんは20年前にも須田さんに会っており、この年の訪問写真を懐かしそうに見入っていた。孫の男の子は「これは僕！」と指差しながら何度も自分が写っている写真を周りの人々に見せていた。

野田良雄さんは昭和16年8月末、勤労奉仕を終えて帰国するとき、清和の地に咲いていたキスゲの種を日本に持ち帰った。今回、自宅に繁茂するキスゲを一株持参した。おばあさんと息子夫婦にその一株を「65年ぶりの里帰り」と手渡し、育ててくれることをお願いした。2008年初夏の今は里帰りしたキスゲの株に黄色い大きな花がついているだろう。

野田良雄さんは3年前に一回この地を訪れていた。しかし、そのときは自分たちの宿舎があった第五部落は特定できていなかった。今回かつての生活の地に立った野田さんは、「似ているなあ」「このあたりが宿舎かな」と、当時の風景を頭の中で見比べてしばらくの間立ちつくしていた。



清和小学校校舎（今は廃校）

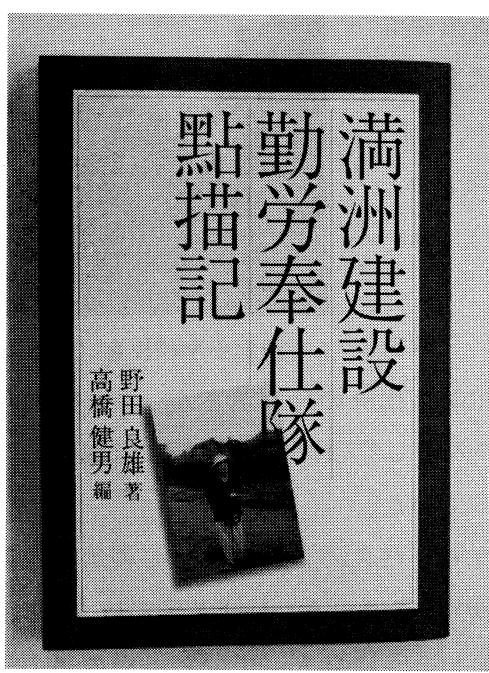


第五部落に立つ野田さん

編集部注：『満州建設勤労奉仕隊点描記』は書店販売はしていないので、希望の方は高橋さん（0258-66-4790）に問い合わせられたい。なお、高橋健男さんは佐渡開拓団跡事件に遭遇した開拓団、方正に集結した開拓団のいくつかの開拓団の事跡を訪ね、『碑が、土塊が、語りかかる—語り継ぐ満州開拓民悲史ー』を出版準備中。その中で方正の中日友好園林や私たちの「方正友好交流の会」にも触れている。

## 満州建設勤労奉仕隊に参加した記録について

野田良雄



私は昭和16年、まだ17歳の時、文部省で募集した満州建設勤労奉仕隊に参加し、その年の5月下旬から8月末まで、東満・虎林の近くの第七次清和開拓団にお世話になっておりました。それからまもなく、12月に太平洋戦争が始まり、昭和20年8月には日本の敗戦で戦いは終わりました。

その頃、大陸からの引き揚げ者で日本全土は大混乱でした。私宅でも、昭和21年8月頃から母方の叔父や、母の家族が帰りはじめ、住処も定まらず、食事も布団も着る物もなくて、母の苦労は大変なものでした。清和開拓団の人々も、てんでにお帰りになったようですが、その様子は私どもにはわかりませんでした。

戦後30年ぐらい後だと思いますが、私は、たまたま地元の新聞で、当時の清和国民学校の校長先生の記事を読む機会がありましたので、校長先生にお手紙をさしあげました。昭和16年夏、あちらに滞在中、校長先生は、食べ盛りの20歳前の少年達へ羊羹や饅頭等の差し入れをして下さいました。

校長先生の出身地、新潟県にある有名な白鳥の来る瓢湖の町へお伺いした事があります。清和から種を持って来て育てたキスゲの苗をお届けしたこともあります。その後、何年か経って、先生の訃報に接し、叙位叙勲の記事を拝見しました。

時は流れ、又、元号も昭和から平成に変わりました。平成14年頃だったと思います。地元紙で長田会長の事を読んですぐにお便りしました。訪中慰靈の事も知りましたが、私は、なかなかふんぎりがつかず、平成17年6月になって、清和を訪問するとの事でしたので、漸く現地行きを決断しました。現地を知っているのは私だけ、現地案内人は若い兄ちゃんで、目指す場所は全く見当がつかず、適当な場所で法要を済ませて来ました。それでも二十人近くの気持ちのよい団体で、楽しい旅だったことが忘れられません。

年が明け、平成18年3月、もう一度皆さんと語り合いたいと思い、長田会長や同行して下さったご住職に相談して許可を貰い、旅行会社の方に参加者の募集をして頂きました。その当日、出席して下さったお客様の中に高橋健男先生がいらっしゃいました。高橋先生とは初めての出会いでした。色々なお話の中で、先生が中学校長を定年で退職され、満州開拓の昔の事を研究され、その結果をまとめられた著書があることを知りました。そし

て、平成19年の春でした。清和開拓団勤労奉仕に関する資料を何かもっていたら見せて貰いたいとのお話がありましたので、私の記録をお送りした様なわけです。十七歳の少年の記録ですが、先生からそれを出版したらとのお誘いがあって遂にお願いすることにしました。平成20年1月末に本が出来ました。

隣の吉川区から一家をあげて満州へ渡った高野長一郎さんの家族が私どもの宿舎の近くに住んでいました。私は時々お邪魔してご馳走になってきました。あのころ、お家を訪問するとき、どんな挨拶をしたろうか？　お宅を訪問するに際して、十七歳の子供がどんな挨拶をしたのか。人様に挨拶するのがなかなか出来ない年頃でしたので、今思い出しても冷や汗が出そうです。

清和を去る時、ほんとうの糯米のボタモチ、それも甘い小豆の餡で包んだ美味しいボタモチをご馳走になったのが忘れられません。あの頃、糯米など満州では栽培されていなかったから、日本から送ってもらった筈です。高野さんのお父さんとお子さんのうち何人が避難中に亡くなられましたが、十歳から十五、六歳位までの子供さんが、お母さんに連れられて帰国されたのを今回はじめて知りました。長男の一男さんは兵隊にとられ、シベリヤからお帰りになって船橋でお母さんと同居しておられたので、私も何度かお便りしたことあります。お母様は数年前に亡くなられました。

私は、今回の出版に際し、お礼に一席設けることを計画、お便りしましたら、三人ほどがおいで下さいまして、話が盛り上りました。あの頃、色々な事情があったようで、姉さんは解放軍の傷病兵看護の方のグループに入り、戦後の昭和28年にお帰りになり、他に三人の弟妹をお母さんが連れてこられたのを今回初めて知りました。高橋先生は十九年五月に私の記録を見て下さってまとめて下さいました。

そして出版に当たって、高野さんのお姉さんのお陰で義妹さんの健在でいらっしゃることも知ることができました。戦後六十三年を迎えるとしているとき、これが縁と言いましょうか、絆と言いましょうか、義妹さんにもお会いすることが出来ました。長野に眠る長姉祖道様をお参りして私どもの会場へおいで下さいました。

満州の大地にお父様と次兄と幼い子供が眠っておられます。一ヵ所しかない日本人墓地が方正にあります。御仏になって私共を見守って下さっている事と思いますが、沢山の日本人の方がお参りに来て下さることを願うばかりです。松食い虫でしょうか、昨夏、詣でたとき、枯れ松の多かったのが目につきまして、悲しくなりました。

国として何とか力を入れてもらえないものでしょうか。縁と糸、糸と絆、本当に大切にしたいと思います。ありがとうございました。

## 方正の『日本人公墓』と『撫順戦犯管理所』

芹沢昇雄

私が方正の「日本人公墓」のことを初めて知ったのは遅く、『東京新聞』が連載した 05 年の「記憶・戦後 60 年・新聞記者が受け継ぐ戦争」シリーズの記事で、今もその記事を大事に保存しています。

私はそれまで「撫順戦犯管理所」で人道的扱いを受けた戦犯達が、自らの力で鬼から人間に戻った「中国帰還者連絡会（中帰連）」の賛助会員でした。「日本人公墓」の話を知り、これは「撫順戦犯管理所」での戦犯への扱いや考え方と同じであり、これは偶然ではなく、中国の「人道的・寛大措置」が本物である事を改めて確認した思いでした。

この記事がキッカケで大類さんを知り、貴会の会報『星火方正』や『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』などを送って戴き、改めて感動した次第です。

その後、「中帰連」が高齢のため解散し、その意志を継ぐ「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」に参加していますが、日本人公墓のお話は「中帰連」の皆様の受けた人道的寛大措置の考え方と一致すると思います。

戦後、中国側は侵略し土地を奪った日本人戦犯や開拓民を、一部の軍国主義者の犠牲であり同じ被害者であると赦してくれました。残留日本人が散逸する同胞の遺骨を何とか葬りたいとの要望に、中国政府は何と！国交も回復していない時代に、政府自らの仕事と使命として成し遂げてくれたのです。

敵民族の遺骨を集め、墓を造り守って下さったのです。日本では考えられないことで「坊主憎くけりや袈裟まで憎い」という言葉さえあり、今でもこの国では行政や裁判の場で公然として、アジア人蔑視の差別が温存しているのです。この中国の皆様の恩を一人でも多くに人の知って欲しいと思います。

罪もない、恨みもない善良な市民同士を戦わせる原因を考えなくてはなりません。私は国と国がどうであろうと、民と民が友好を繋ぐことは不可能ではないと思っています。

日中國交回復以前に岡崎嘉平太氏らが民間貿易を先行し、周恩来の信頼を受け國交回復に大きな力になった事をご承知と思います。貴会の運動は正にその民間交流でも貴重な大きな業績だと思います。私たちの象徴は「撫順戦犯管理所」と場所こそ違いますが、「反戦平和・日中友好」の目的は同じであり頑張りたいと思います。

手元には、その後の 07 年夏の東京新聞・羽田澄子さんの「友好の原点『記録に』」や昨年 10 月の大類さんの「私の視点」、そして、先日お送り戴いた「聖教新聞」掲載の大類さんの記事などを大事に保存しております。

憎しみを超えることや、加害を赦すことは容易なことではありません。しかし、「憎しみから平和は生まれない」ことを周恩来は実証したと思います。

貴会のホームページ『星火方正～燎原の火は方正から～』も拝見しております。今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

(撫順の奇蹟を受け継ぐ会・中帰連平和記念館・事務局)

\* 編集部注：次頁に 2 本の関連記事を参照されたい。



「もう一度武器を持つてこの大陸に来ないでください」。そんな言葉とともに元日本兵が中国から種を託され、佐賀市で半世紀も夏とに花をつけているアサガオがある。実話をもとにした絵本「赦しの花」=写真=が、戦争体験の聞き取りをしている福岡県の戦後世代の教師やイラストレーターたちの手でまとめられた。

(佐々木亮)

モデルは佐賀市に住む副島進さん(90)。戦犯収容施設で元日本兵の世話をしていた中国人指導員をして、中国人指導員に種を渡され、「日本へ帰ったら、きれいな花を咲かせて幸せな家庭を築いてください」と言葉をかけられた。

副島さんたち元日本兵

# 「非戦」の花、絵本に

の多くは中国侵略を「中國人と日本人が協力してアジアを守り、米英と戦っている」と信じ込まされていた。

敗戦後、中国人人々から「のしられたり、仕返しされたりするだろうと思つた。ところが施設で

## 中国の人々から託された種

はきちんとした食事が用意された。人道的な扱いに心を打たれ、自分たちの加害に向き合つようになり、涙ながらに謝罪しながら、庭先に咲いていたアサガオの由来を知った。

## 元日本兵宅で半世紀咲く

中友好と平和を願い、語り継がれてきた。絵本をつくったのは「撫順の奇蹟を受け継ぐ会・九州支部」(事務局会・九州支部)の横山浩文さん(45)らは03年に聞き立つた。

留学生一家に頼んで中国語の訳を添えた。詳しい証言と補足資料の小冊子や、この話を題材にした合唱曲のCDを付録した。定価1500円。問い合わせは撫順の奇蹟会・九州支部(事務局)(090-7477-3888)。



副島さんが持ち帰った種から育ったアサガオ。夏になると、花を咲かせる。佐賀市内で、撫順の奇蹟を受け継ぐ会・九州支部提供

連に扣留され、1950年に中國側に引き渡された。約千人の戦犯のひとりとして東北部(満州)の撫順戦犯管理所に収容される。報復的な扱いや厳罰も予想されたが、食事や医療は手厚く、ひどい死刑には処せられなかった。

56年に解放されて帰国する時、朝鮮の種をもたらしたところ、「もう一度武器を持つての大陸へ来ないでください」「日本へ帰ったら、きれいな花を咲かせて幸せな家庭を築いてください」。この種の由来や、加害の罪を認める日本人を描いた繪本「赦しの花」(無頼の奇蹟をを受け継ぐ会・九州支部編)には、職員がこう言つて種を手渡す場面がある。

「撫順は石炭の出る所である。」  
100年近く前、夏目漱石は遼寧を  
訪ねてこう記した。大学の教師を辞め、  
朝日新聞に入つて4年後。日露戰争に勝つた日本は、日滿の鉄道など  
ロシアの権益を逐一形で大敗した。  
陸續出の道を歩んでいた。その南滿洲鐵道(滿鉄)の線路は、激戦の学  
州鐵道(滿鉄)の線路は、激戦の学  
生仲間だった人物が就いていた。  
「まあ海外における日本人がどんな  
事をしているか、ちのと見て来る  
がいい。御前みた様に何にも知らぬ  
いじ高慢な顔をして、うるさいほん  
迷惑するから」。そう言つて招かれ  
たところ、満州と朝鮮を旅し、「満  
韓(ムンヘン)」を朝日新聞に連載

庭先の、細い竹を組んだ小さな垣根に、こいつもの朝顔が咲いていた。濃い藍色の花弁のそここに、浮かび、九州の空を映していく。佐賀市郊外の副島進さん宅を訪れたのは、6月の下旬だった。91歳になる副島さんは脳梗塞で入院中だったが、この朝顔は、半世紀も前に中國から持ち帰った種の子孫だといふからである。

# 時の肖像

卷之三

8月の光と闇



コラージュ=羽生春久

敗戦で日本がひかげた45年の日々は、年々遠くなつてゐる。戦長や戦争の時代を肌で知る人たちはもう死んでしまつた。だからこそ、遙の来る歳にはなつた。だがいいぞ、遙の来る歳にはなつた。口にしてみたい。  
「今、戦争が終わつた」と。  
戦争が今終つたと仮定して、身の回りのあらまを想像する。奪い、奪われて取り返しのつかない命や物を失つた時のことじしが身に迫つてくる。光の満ちるあふれる8月3日、闇の遙くの8月3日もある。海を越え、時を超えて咲く朝顔を前に、一度と立ち止まることなく進んでいく。その時が遙り来ないよう心に念じた。

月1回掲載します。筆者は  
「天声人語」の前担当者です。 ◇

-32-

# 「原子爆弾に思う」

1945年8月9日付・重慶『新華日報』時評

原子爆弾の発明と初めての使用は、全世界を震撼させた。科学の革命と戦争の革命が、同じ日に起きた。

原爆のほんとうの性能について、われわれはまだ検討できるだけの十分な資料を持っていないが、今までに得たニュース報道によれば、その破壊力の猛烈さと殺傷性の巨大さは、疑いのない事実である。日本の侵略者が初めて人類史上空前の強烈な兵器による打撃を受けたことは、当然の報いといえる。この8年来、日本ファシストによる野蛮な虐殺に遭ってきた中国人は、だまされている無辜の日本人民を除き、日本軍閥に対してはいさかの憐憫の情ももっていない。しかし、本来は人類の幸福に奉仕すべき科学が、このように残酷な破壊力と殺傷性をもつ兵器に応用されたことは、全人類、とりわけ科学に献身する学者が、深い感慨を覚えるにちがいない。

純粋の科学的見地から言えば、原爆の発明は、原子の分裂により生まれるエネルギーの応用であり、画期的な革命に違なく、このエネルギーを制御する装置が完成するなら、産業革命は色あせ、蒸気機関、内燃機、水力タービンなどは旧時代の遺物になり、石炭や石油の獲得競争が引き起こす政治的角逐はその意義を失うことになる。このようなエネルギーが建設的な動力と平和産業に応用される暁には、人類の文明は画期的に改善されるに違いない。だが今日、不幸なことに、人類の歴史に大きな影響を与えるこの重要な発明は、まず大量殺人にその威力を試されてしまった。

自然科学の発達は、欧洲で封建社会を覆し市民階級が台頭して近代文明を創造する原動力になった。十八世紀末から十九世紀初頭にかけ、科学者は社会革命の第一線に立つ戦士として、人類の幸福に献身した。若い科学は若い階級と共にあり、「科学に殉じる」とことと「真理に殉じる」とことは同義語であった。その後、ブルジョアジーが成長し老衰するのにもない、この階級が操る科学も、その階級利益に奉仕することから、しだいに全人類の福祉を図るという本来の目的から背離していった。生産的から消費的へ、建設的から破壊的へ、人間を生かすことから殺すことへの変化は、科学精神の逆転と冒瀆につながった。

戦争の時代になると、率直に言って、ふつうの人は科学者に対し、ひそかに警戒心を抱いている。英国の著名な科学者ハイドン教授は、同国の総選挙期間中に発表した「彼らはなぜ科学を怖がるか」という論文で、人民大衆が科学を恐れることにつき、思いをめぐらせており。言い換えるなら、今回の戦争の目的が戦争をなくすことにあるとはいえ、科学者が懸命に取り組んでいる仕事の成果が、ロケット砲弾、地震爆弾、細菌爆弾、さらには

原子爆弾になって、一瞬のうちに無数のわが子、夫、父親を殺傷するのは、人民にとって恐るべき事実なのである。原爆の研究責任者のアンダーソン卿は7日、ロンドンにおけるラジオ演説で「これは大衆に幸福をもたらすこと、人類に破壊をもたらすこともできる」から、「原爆の運用にあたっては政治家の最高の精神が必要不可欠であり、国際連合の政治家が協議しなければならない」と語った。

科学が人民の手にある時、それは人びとに幸福をもたらすが、ファシスト侵略者の手にある時は、人類を破滅させることもできる。だから原爆は平和を守る有力な手段にもなれば、侵略の兵器にもなるのである。人類の歴史の最高の成果である科学的発明は、平和を愛する全世界の全人民が保有し、使用し、制御すべきであり、科学的発明による無尽蔵のエネルギーは、人類に幸福をもたらす方向で使われるべきである。一瞬のうちに無数の人命を殺傷するこのような兵器は、国連安保理事会が使用をコントロールすべきであって、今日にあっては、世界の進歩的科学者と人民が担う責務になっている。

科学が人民のものとなり、科学の成果を、平和を守り人類に幸福をもたらす手段にしようではないか。

(武吉次朗訳)

## 「満洲移民の村」のけじめ

『満洲泰阜分村—七〇年の歴史と記憶』編纂にたずさわって

猪股 祐介

### はじめに



長野県下伊那郡泰阜村は2007年、満洲への分村移民を決めた1937年から70年目を迎えるにあたり、『満洲泰阜分村—七〇年の記憶と歴史』（以下『七〇年の記憶と歴史』）を刊行した。泰阜分村大八浪開拓団（以下、大八浪開拓団）の記念誌は、1979年に『満州泰阜分村—後世に伝う血涙の記録』（以下『血涙の記録』）が刊行されたが、それから30年弱が経ち、長らく絶版の状態にあった。本書の刊行は、『血涙の記録』の復刻を願う声や、大八浪開拓団の体験者が少なくなった現況を憂える声に応えるものであった。私は『七〇年の記憶と歴史』編集委員の一人として、その企画・編集に深く関わった。そこで、刊行にまつわる喜びや苦労を交えながら、内容を紹介したい。

本書は、大八浪開拓団の記憶を書き残す、おそらく最後の機会になるだろうという想いから、全5部構成、1000頁を超える大部となった。各部の構成は以下の通りである。第I部は開拓団当事者による手記・聞き書き・座談会の記録、第II部は『血涙の記録』の抄録、第III部は泰阜村役場資料に基づく論考、第IV部は役場資料を厳選・採録した資料集、第V部は開拓団の名簿と年表である。

### 体験者が語る大八浪開拓団

第I部は、大八浪開拓団の体験者が、分村移民の送出から現在までを思い起こして語り綴った記録を収めた。本書の核となる部分である。手記は、大八浪会（大八浪開拓団元団員の親睦団体）の16名より寄せられた。『血涙の記録』の時点では綴れなかつた、集団引揚者の戦後体験、中国残留者の残留体験や永住帰国後の生活、訪中や日中友好への想いが記されている。私は、彼らの戦後体験が引揚げ（帰国）時期によって異なることから、1946年引揚組、1953年引揚組、1970年代以降の帰国組ごとに並べた。これにより、内容が近い手記がまとまり、読み易い順番になったと思う。

聞き書きは、飯田の「満蒙開拓を語りつぐ会」の活動を応用し、村内から聞き書きボラ

ンティアを募集した。これには、地元の人びとが大八浪開拓団の体験者から、じかに感じたものを、後世に伝えてほしいという願いが込められている。聞き書きボランティアの大越慶、大越葉子、西山敬子は、それぞれ体験者のお宅に足繁く通い、ときに餃子などを御馳走になりながら、曲折に満ちた人生の語りにじっくり耳を傾けた。そして、聞き書きの方法を、わずかな説明と豊かな実践経験によって会得し、専門家顔負けの聞き書きを完成させた。体験者の語り口をいかしつつ、手際よく整理された 3 本の聞き書きは、私たちが知らなかった、引揚者や残留者の生々しい現実を伝える。

座談会は、手記や聞き書きが敗戦後の苦難を強調し、満洲での開拓団生活に関する言及が少ないと、また、戦後 60 年余を経ち、開拓団での農業経営など詳しい事情を知るもののが減っていることから企画された。11 名の体験者が集まり、前半は日常生活を、後半は農業経営をテーマに話し合い、編集委員の私と今井良一が司会を務めた。その際、体験者に当時のことを思い出してもらうために、大東亜省が 1943 年に刊行した『第八次大八浪開拓団総合調査報告書』(以下『大東亜省報告書』) を紹介し、満洲移民の衣食住や農業生活に関する写真を配布した。議論が集中したのは、日常生活では劣悪な衛生状態と疫病の蔓延、農業経営では現地住民の雇用であった。

第 II 部の『血涙の記録』抄録では、第 I 部の手記との兼ね合いを考慮し、団員 42 名の手記から 8 名を選んだ。篠田欽次と熊谷秋穂の手記は、『血涙の記録』の手記の続編として書かれた。第 I ・ II 部の手記を読み通すことで、敗戦から戦後引揚げまでの一代記となる。また、今回手記を寄せた宮下やゑ子の母、稻葉操の手記を再録した。両者の手記を読み比べると、母娘が異なる視点から、敗戦後の逃避行や引揚後の戦後入植を捉えていることが窺える。このほか 5 名の手記は、開拓団生活・敗戦後の逃避行・シベリア抑留・残留生活について、今回の手記を補うものとして再録した。

### 泰阜村と大八浪開拓団一分村計画から方正県との友好提携まで

第 III 部は、満洲移民・中国帰国者研究者による 5 本の論文からなる。第 1 章の蘭信三論文は、小林弘二『満州移民の村—信州泰阜村の昭和史』(筑摩書房、1977) や長野県開拓自興会『長野県満洲開拓史』(同会、1984) 等の文献を駆使して、大八浪開拓団 70 年の歴史が概観される。1937 年の分村移民の決定に始まり、開拓団生活、1945 年の敗戦と引揚げ、1953 年の集団引揚げの再開と 1958 年の打ち切り、1972 年の日中国交正常化後の中国残留者・帰国者支援に至る 70 年を、その背景となる、戦前の満洲移民事業や戦後の日中関係とともに説き明かす。

第 2 章の今井良一論文は、『大東亜省調査資料』をもとに、大八浪開拓団が 1939 年の入植からまもなく、農業経営と日常生活で深刻な問題を抱え、早晚崩壊する状態にあったことを指摘する。農業経営では、現地住民の雇用労賃に加えて、開拓団内の不和や自家労働

力の低さにより、経営状態が悪化した。日常生活では、現地風土への不適応や日本式の生活様式の維持により、現金支出が増大した。これら今井の指摘によって、大八浪開拓団が泰阜村での人間関係や習慣に縛られたままで、現地社会に適応しなかったことが示される。

第3-5章では、「泰阜村役場資料」（以下「役場資料」）を活用し、泰阜村による引揚者援護、帰国者援護、日中友好事業が論じられる。「役場資料」は、1937-1997年の満洲移民・中国帰国者の関連資料を、項目ごとにA4リングファイル20冊に綴じ、整理したものである。これだけの資料が整理・保管されてきたのは、元泰阜村助役で編集委員長の、宮島義寛の尽力によるところが大きい。ただ村役場が1945年に火災にあったため、戦前資料は1937、38年のものに限られ、戦後の引揚者援護・帰国者援護関連資料が圧倒的に多い。そこで戦前資料は重要なものを第IV部に全文掲載し、戦後資料は主に論文のなかで紹介するにとどめた。こうして「役場資料」に依拠して、戦後泰阜村が分村移民の責任とどのように向き合ったかを検証する、3本の論文が執筆された。

第3章の猪股祐介論文は、泰阜村の1950年代の引揚者援護を、戦後開拓を含めて論じたものである。泰阜村は引揚者を独自の手厚い援護策をもって迎えた。引揚援護「愛の運動」への協力や、県外開拓団の援護会結成はその一例である。しかし、泰阜村の引揚者援護は、1950年代後半、一旦終止符が打たれる。1959年の「未帰還者に関する特別措置法」施行が決定的な意味をもった。「役場資料」からは、日中国交が断絶され、ほとんど情報が入ってこないなか、未帰還者の死亡宣告に同意する家族の苦悩が窺える。未帰還者問題は「解決」とみなされ、引揚促進の施策は途絶えた。

第4章の山田陽子論文は、泰阜村が日中国交正常化後、中国残留日本人の帰国促進や定着援護において、国に先んじて、手厚い援護を行ったことを指摘する。たとえば、「特別身元引受人」制度が中国残留婦人に適用される以前に、泰阜村は厚生省に確約書を提出することで、残留孤児・残留婦人の永住帰国を実現させた。また、中国帰国子女教育にも、1973年という早い段階から取り組んだ。山田は、泰阜村において、これら先進的な中国帰国者援護策が実施された理由を、村役場と大八浪会・飯田日中友好協会泰阜支部、村職員と村民という官民連携に見出している。

第5章の小都晶子論文では、大八浪開拓団の「中国残留者」が集中したハルビン市方正県と泰阜村の関係に着目して、日中国交正常化以降の帰国援護と、1990年代の友好交流が扱われる。泰阜村は分村移民送出の責任を痛感し、日中国交正常化直後から、帰国者援護を村の重要な事業と位置付けた。また1988年には、村長を団長とする日中友好訪中団が派遣され、方正県で残留者の対面調査を実施し、日本人公墓を参拝した。これら泰阜村の地道な取り組みがあつて、1989年のNHKドキュメンタリー番組『忘れられた女たち』放映後の全国的な残留者支援の広がりを、活かせたとされる。

第IV・V部は資料篇となる。第IV部は「役場資料」のうち、戦前の分村移民送出関連資料をコピーし、テーマごとに整理したものが多くを占める。泰阜村に限らず、満洲分村移民の送出に関しては、農村恐慌対策では説明できず、未解明な部分が多い。「役場資料」は、分村移民と経済更生運動との関わりや負債処理について詳細な記録があり、送出過程の解明に大きく寄与すると思われる。戦後資料では、1997年の泰阜村と方正県との友好提携調印の資料などを収めた。

第V部の年表・名簿は、現時点で可能な限り詳細かつ正確な、大八浪開拓団の基礎データである。年表は、宮島らが、「役場資料」から一つづつ記事を丹念に拾い上げ、作成した。名簿は、宮島らが、長野県開拓自興会の名簿と村の団員名簿を精査したのち、大八浪会有志の記憶と一人ずつ照合させたデータを、蘭がコンピュータ処理して作成した。集計の結果、大八浪開拓団の在籍者数1420人、うち帰国475人、現地死亡627人、不明41人、未帰還者1人という数字が弾き出された。

### おわりに

方正友好交流の会としては、泰阜村と方正県の国際交流を扱った、第III部第5章の小都論文や第IV部の役場資料に、まず目が行くことだろう。また、そもそも大八浪開拓団がどのような分村移民であったのか、なぜ方正県に取り残された団員が多かったのか。こうした疑問を持たれる方は、第III部第1章の蘭論文で大八浪開拓団の歴史的背景を知ったのち、第I部の手記と聞き書き、第II部の『血涙の記録』再録と読み進めてもらい、泰阜村と大八浪開拓団が背負った歴史の重みを感じ取って頂きたい。国の引揚者援護や中国残留者・帰國者援護に憤りを覚える方は、第III部第3-5章の論文を読んで頂きたい。泰阜村が分村移民送出の責任と真摯に向き合った姿勢は、今後どのように引き継いでいくかを含め、私たちに多くの課題を突きつけることだろう。

2007年10月18日、大八浪開拓団の慰靈祭のあと、『七〇年の記憶と歴史』の出版記念会が開かれた。高齢の元団員が「子や孫に渡す」といって、分厚い本書を何冊も抱えて帰る姿を見送ったとき、出版までの苦労が報われた気がした。私は開拓団誌の編纂に関わったのはこれが初めてで、役場資料の整理、聞き書きの指導、座談会の企画・運営、そして1000頁を超える原稿の編集と、慣れない作業の連続であった。なんとか職務を全うできたのは、泰阜村役場や大八浪会の手厚い支援、村内編集委員の協力、宮島編集委員長並びに蘭編集統括の指導のおかげである。発売元の不二出版は、『満州移民資料集成』を出版してきた実績から、本書刊行を利益度外視で引き受けた。多くの人びとの想いが集まり、本書は世に出された。あとはひとりでも多くの読者を得ることを願うばかりである。

# 満洲泰阜分村—七〇年の歴史と記憶

<満洲泰阜分村—七〇年の歴史と記憶>編集委員会編

発行 長野県泰阜村 発売 不二出版

## 口絵・地図

はじめに—満洲泰阜分村の歴史に思う 松島貞治（泰阜村長）

序一本書刊行にあたって 蘭信三（京都大学准教授）

## 第I部 いま振り返る大八浪開拓団の七〇年

- 一 手記
- 二 聞き書き
- 三 座談会

## 第II部 再録『満州泰阜分村—後世に伝う血涙の記録』（抄録）

### 第III部 論考 泰阜分村大八浪開拓団

- 一 大八浪開拓団の七〇年の歴史と記憶 蘭信三
- 二 大八浪開拓団の農業経営と開拓生活 今井良一（京都大学研修員）
- 三 泰阜村の引揚者援護 猪股祐介（日本学術振興会特別研究員）
- 四 「中国帰国者の定着自立支援」 山田陽子（名古屋市立大学大学院生）
- 五 日中国交正常化以降の引揚援護 小都晶子（大阪大学非常勤講師）

### 第IV部 泰阜村役場資料

- 一 分村送出関連資料
- 二 分村移民送出経過と戦後の状況
- 三 戦後開拓送出状況
- 四 中国残留者帰国支援関連資料
- 五 友好提携調印並びに相互訪問資料

### 第V部 年表・名簿

- 一 大八浪開拓団年表
- 二 大八浪開拓団名簿

編集後記 宮島義寛（編集委員長）

※肩書きはすべて 2007 年 10 月当時。

(A5 版・上製・総 1,044 頁、定価 8,000 円+税)

※ご注文は、最寄りの書店、または不二出版（〒113-0023 東京都文京区向丘 1-2-12 、  
Tel03-3812-4433、FAX03-3812-4464）にお願いいたします。



県日中友好協

# ハルビン～長春～瀋陽 開拓民の足跡たどる



旧満州で非業の死を遂げた開拓民が眠る日本人公墓＝中国・方正県  
方正友好交流の会提供

の引き揚げがかなはず、飢えや病氣で亡くなつた開拓民約五千人の遺骨が納められている。加藤会長は「墓は国交回復前に建てられた。友好の真意をかみしめて手を合わせたい」と話している。訪問団には友好協会員のほか、県内在住の引き揚げ者も参加する予定。

徳島県日中友好協会（加

# 平和条約30年 6月滿州訪問

訪問団は六月二十一日に  
にハルビン市入り。二十日  
二日、方正県の公墓や現  
地の小学校を訪れ交流す  
る。その後、列車で長春  
(旧新京)へ移動。さら  
に瀋陽(旧奉天)へ南下  
し、国に捨てられざる  
いの旅を続けた開拓民の  
足跡をたどる。同二十六  
日帰国の予定。  
「中国人が日本人のた  
めに建てた墓がある」と  
の情報を得て、友好協約  
平和条約締結三十年の節  
目の年に訪問することに  
した。旧満州には国策と  
して推計約三十万人、県  
内からも四千人近く送り  
込まれたとされるが、一  
九四五年夏のソ連参戦と  
敗戦による混乱で、多く  
の移民が悲惨な末路をた  
どった。

公墓は國父が回復する  
約十年前の六三年、中國  
政府が建立。当時の周  
恩来首相の「日本軍主  
義者と開拓民を区別す  
る」との方針に基づき建  
てられたという。飢えや  
病で亡くなった開拓民を  
納骨していく、幅三尺、  
高さ一・五尺の円形。草  
前に三、三歳の石碑があ  
り「方正地区日本人公

「草」の文字が刻まれてい  
る。公墓の存在を広める活  
動を続いている方正友好  
交流の会（東京）の大類  
善啓事務局長は「日中間  
にいろいろな問題はある  
が、互いの民族のメンツ  
にござわると未来は開け  
ない。公墓は友愛のシン  
ボル。建立された精神が  
9. 9. 088 (655) 262

広がることが大切」と、  
友好協の訪問を歓迎して  
いる。

県友好協の加藤会長は  
「これから日の目中関係の  
在り方を考える機会にし  
たい」と話していく。一  
般参加も募っている。問  
い合わせは、友好協（電

「墓」の文字が刻まれてい  
る。――広がることが大切」と、  
友好協の訪問を歓迎して

「広がることが大切」と、  
友好協の訪問を歓迎して

# 中国残留「不忘の碑」



戦時中、国策として満州（中国東北部）に渡り、戦後も国の無策で大陸に取り残された残留婦人の言葉に感銘を受けた主婦が、私財を投じて石碑を建立した。東京都調布市にある「延淨寺」境内にたたずむ石碑に刻まれた文字は「不忘の碑」。十二日に記念のつどいを開く。（出田阿生）

## 体験談に感銘 調布に建立 国立の女性 私財で

建立したのは国際市お金を使った。きっかけだ。

赤塚頌子さん（六七）は、国分寺市の残留長年、保育の仕事に携わる、こつこつためたのインタビュー記事（南省・ハラベイ）へ渡り、国に大きな力に

お見えた。刻まれた言葉は、「國に従って國に棄てられた人びとを忘れず、ふたたび同じ道を歩まぬための道しるべに」。

慰靈碑ではなく、絶対に一度と戦争はないという決意、未来につながる石碑をつくりたかった」と赤塚さんは話す。

記念のつどいは、十

月に開催される「慰靈碑ではない」と、伝える

事で訴えた。

自らは戦争体験がない赤塚さんが、昨年夏に記事を読んで「忘れない」と、伝える

記念のつどいには、十

月に開拓団に交じって地獄の逃避行も経験。この時、暴徒にやりで突かれて血まみれになった知人の女性が「何のために大陸に来たのか。国に帰つて、この死にさまを伝えてく

か。」と叫んだ言葉は、敗戦から三十三年後に帰国するまで胸に刻まれていた。残留邦人の支援をする「中国帰国

と伝えると、鈴木さんから「石碑をつくるべきではない」と提案された

という。演出六さんを招いて講演会を開く。参加無

者会」を主宰し、国務所を残留孤児の日本語教室の会場に提供

していた延淨寺の住職網代正孝さん（六七）が境内の一隅を貸してくれた。

（六七）。

### 12日、記念のつどい

不忘の碑について話す赤塚頌子さんと延淨寺の網代正孝住職

知人と石碑の文案料。練った。文字は、問い合わせは同寺り合いの書家が無償で書いてくれた。寺の社電03（33326）73337。



## 異説　日本人公墓の由来

奥村正雄

1月中旬、知人が1冊の書籍を送ってくれた。『満州移民—飯田市下伊那からのメッセージ』（編集・飯田市歴史研究所、発行・現代史料出版）である。

第1章　満州移民の前史—1920年代、30年代の飯田下伊那

第2章　満州移民の送出と開拓地の生活

第3章　逃避行から引き揚げへ

第4章　満州移民の戦後史

という構成。すでに周知のように長野県は満蒙開拓団を最も多く送出した県であり、旧泰阜村の分村移民など、飯田下伊那と開拓団の歴史は、かねて知りたいと思っていたもの一つだった。それが繭値と飯田の男が遊郭で遊ぶ金額との関連づけなどを読み進むうち、その説得力に圧倒された。

### 落差に呆然

ただ、第4章まで読み進んだところで、前へ進めなくなってしまった。次の記述を看過できなかったからである。

《方正に唯一の日本人公墓が建てられた経緯は次のように。方正県は関東軍が駐留するところだとして、避難開拓民が集中したところで、ここに開拓民を収容した伊通漢（→伊漢通の誤り）收容所がありました。ここでは45年の嚴冬を越せずに、日本人開拓民4500人あまりが死亡しました。1963年、山形県天童出身の松田ちゑという中国残留婦人が方正近くを訪ねたときに、おびただしい日本人の真っ白な遺骨の山を発見して、遺骨を埋葬する許可を方正県人民政府に申請したことからはじまります。ちゑは、みずからも方正の収容所で子供を亡くしていたこともあり、遺骨収集と墓碑建立を熱心に請願します。その結果、方正県人民政府と黒龍江省人民政府の許可を得て、5月に仮の墓標が建てられ、64年10月に現在の日本人公墓という立派な墓石が完成したのです》（208ページ）

これは事実とだいぶ違う。松田ちゑさんが砲台山の山中に同胞のおびただしい白骨を発見して日本人公墓の建設に奔走したのは事実だが、この許可は方正人民政府はもちろん、黒龍江省人民政府も判断できず、結局、中央政府の判断を仰ぐこととなった。これを裁可したのが周恩来総理だと言われている。そして1964年に建てられた最初の墓碑（木製）はその後ダムを作るため移動し、現在の墓石はそれから10年後にハルビンから松花江を船で運んだものである。

この公墓の建設を周恩来総理が許可したという経過について同書は山本慈昭さんと周総理の話し合いによる、として次のように記している。

《64年に（慈昭さんが）日中友好協会の団長として、中国人62柱の遺骨を持って訪中します。北京で周恩来に会った慈昭は、旧満州の日本人の遺骨収集への協力をお願いしますが、拒絶されます。その代わりに、周恩来は日中友好の碑と平和のために、方正県に日本人慰靈碑を一つだけ建てることを認めたのです》

この記述は上の日本人公墓建設の経過の記述と明らかに矛盾する。わずか数行隔てた行にこのような記述があることはどうしたことだろう。私は改めて同書の目次を見た。それぞれのパートを飯田市歴史研究所のスタッフ（研究員、調査研究員、調査研究補助員）が分担して執筆されているが、上記の部分を担当されているのは同研究所顧問研究員の一橋大学教授M先生である。

### 疑問をただす

私は衝撃をそのままにしておくことができず、3月17日、同研究所あて次のような書面を簡易書留で郵送した。

＜飯田市歴史研究所 御中

突然お便りを差し上げます。貴研究所刊「満州移民—飯田下伊那からのメッセージ」を拝読いたしました。繩と地域経済と満州移民の関係など、実に説得力のある記述に圧倒されました。ただ、第4章の記述の一部に、お尋ねしたい箇所があることに気づきました。207ページから208ページにかけて、方正県にある「方正地区日本人公墓」ができた経過と、その関連の記述についてです。

この公墓の建設のきっかけを作った松田ちゑさんは現在、東京都板橋区で息子・崔鳳義さん夫妻と暮らしていて、私は時々、おじやましていますが、事実は貴書の記述とかなり違うように思います。関連して、周恩来総理が山本慈昭さんにこの慰靈碑を方正に建てるなどを許可した、という記述も理解が困難です。この記述がどういう根拠に基づいているものか、ご教示いただきたいと思います。

実は私もそのメンバーであります方正友好交流の会が6月の総会を前に、次の会報を出す準備を進めておりまして、上記の疑問に対する貴研究所の回答を掲載させていただきたいと考えております。原稿の締め切りが4月10日でございますので、それまでにお願いできれば有難いと思います。参考までに別便で前号の会報をお送りいたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

2008・3・17 奥村正雄>

### 届いた返事

これに対し、4月10日、次のような回答が届いた。

『満州移民—飯田下伊那からのメッセージ』をお読みいただき、ありがとうございます。

奥村様の手紙が、飯田市歴史研究所から私の自宅に転送され、新年度のいそがしさのなかで、返事するのが遅れてもうしわけありませんでした。

お尋ねのところですが、じつは方正日本人公墓を設立の経緯について述べたところは、奥村正雄様の文章によって書きました。「天を恨み地を呪いました一中国方正の日本人公墓を守った人たち」『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』東洋医学舎、平成15年）がそれです。

『満州移民』はコンパクトなほんなので、すべての引用文献を記すことができず、本来なら奥村氏の論考を巻末に記すべきでしたが、失礼しました。松田ちゑ氏に關係する文章は、奥村氏の論考から書いたものです。

また、山本慈照氏の中国訪問と方正日本人公墓の建立の関係を直線的に結び付けているのは、あとで読み返して、たしかに誤解を招くと思いました。日本人公墓は1964年に建立されましたかが許可は前年であり、山本慈照中国訪問と直接結びつけるのは間違いでしよう。満州で多くの犠牲者を出された遺族たちの悲しみが、中国政府を動かして、日本人公墓が建立されたものと思います。そのひとつとして、戦後の山本慈照氏らの日中友好の活動があったのだと思います。

これらの不十分な点、今後の『満州移民』が再校になった際に訂正し、奥村様の論考は引用文献として掲載したいと思います。

なお、『方正友好交流の会会報』5号有難うございます。じつは、昨年の10月10日の朝日新聞で方正友好交流の会事務局長大類善啓氏の「日本人公墓を知っていますか」を読んでこの会の活動を知り感銘しました。文章のなかで、戦後も文化大革命のときに、紅衛兵がこの公墓を破壊しようとしたときに、「これは日本軍の墓ではない、日本の庶民の墓である。彼らに罪はない」と言った黒竜江政府の行動を初めて知り感動しました。このような事実と日本人公墓の歴史を多くの日本人に知ってもらい、訪ねてもらいたいものだと思います。これから日中友好を心から願っています。

飯田市歴史研究所顧問研究員 森 武麿

》

この回答によって、この記述は私たちが編集して出版した『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』に拠ることを知った。それならば改めて疎漏な読み方と言わざるを得ない。また山本慈照さんに周恩来総理が「そのかわりに方正に日本人公墓を一つだけ建てるこれを認めた」は『風雪…』とは全く結びつかないし、その説明もないまま「(中国政府を動かした遠因として、遺族たちの悲しみのほか) 山本慈照氏らの活動があったのだと思う…」というのは、別の観点であり、答えではない。

# 日中友好の原点を歩く

## ～日本人公墓と撫順戦犯所などを訪ねる旅～

日中平和友好条約が締結されてから30年。日中間ではしばしば歴史認識のギャップから、絶えず摩擦が浮上しています。それが両国で、反日感情や嫌中感情を煽るという、不毛な事態が生まれています。このようなナショナリスティックな動きを見るにつけ、方正日本人公墓や日本人戦犯が収容された撫順戦犯管理所の存在と、そのありようは、多くのことを教えてくれ、ある種の光明をもたらすものと思われます。

国策として旧満州に入り込んだ「開拓民」たちが、ソ連参戦と敗戦の中、祖国日本を目指して逃げ惑い、飢えと寒さと伝染病などで斃れました。その婦人や幼児など、5000体近い犠牲者を祀っている方正日本人公墓は、民族の憎悪を超えて友好の道を切り開こうという当時の周恩来首相の決断で建立されました。

中国人に蛮行を働いた日本人戦犯は、撫順戦犯管理所に収容されました。元戦犯らは、「日本人は白米を食べるのだ」と主張。管理所側はその要求を受入れ、白米の他にも肉や野菜を用意し、また梅毒などに罹った者には当時、高価で入手しにくい抗生物質を投与して救いました。家族を虐殺された職員からは当然、このような寛大な措置に不満の声があがりました。しかし、ここでも周首相の「戦犯といえども人間であり、人格を尊重し、民族の習慣を守るべきだ」と指示、憎しみの連鎖を断つように指導しました。

戦犯たちは、徐々に自らの罪過を認識し、謝罪しました。そして無罪放免され、帰国後日中友好運動の一翼を担いました。撫順戦犯管理所には「満洲國皇帝・溥儀」も収容されていました。現在、内部を改装中ですが、候桂花・管理所所長は、特に我々のために時間を割いてご説明していただけること、当時の様子を偲びたいと思います。

ぜひ、この旅にお出かけください。

主催 社団法人 日中科学技術文化センター、方正友好交流の会

問い合わせ先：大類、藤井 電話：03-3295-0411

F a x : 03-3295-0400 E-mail : [ohrui@jcst.or.jp](mailto:ohrui@jcst.or.jp)

# 友好の原点を歩く—哈爾浜・方正・瀋陽 5日間—

日時 曜日	都市名	時間	スケジュール	食事
① 7/9 (水)	成田→NH903 大連➡ 哈爾濱	10:30 12:30 午後 夕刻	■空路、全日空（指定）にて港町の大連へ（約3時間） ■午後、国内線に乗り継ぎ、黒龍江省の省都・哈爾濱へ（約1時間半） ■着後、ホテルへ  ＜哈爾濱・崑崙酒店泊＞	昼:機内食 夕:郷土料理
② 7/10 (木)	哈爾濱 方正県 哈爾濱	午前  午後	■朝食後、中国で唯一の日本人公墓が建立されている方正県へ（高速道路約3時間） ■方正県政府への表敬訪問 ■「中日友好園林」にある日本人公墓を参拝 ■ゆかりの地、伊漢通開拓団跡地を視察 ■終了後、哈爾濱市内に戻ります。 ■ロシア料理の夕食  ＜哈爾濱・崑崙酒店泊＞	朝:ホテル  昼:郷土料理  夕:ロシア料理
③ 7/11 (金)	哈爾濱➡ 瀋陽 D26	午前  15:38 19:31	■ハルビン市内観光 731部隊罪証陳列館、伊藤博文暗殺の地・ハルビン駅、松花江の流れを見ながらスターリン公園散策、20世紀初期の欧風建物が残る中央大街（キタイスカヤ）散策など。 ■昼食後、中国新幹線にて遼寧省の省都・瀋陽（旧奉天）へ  ＜瀋陽・古都新世界酒店泊＞	朝:ホテル  昼:東北料理  夕:郷土料理
④ 7/12 (土)	瀋陽 撫順 瀋陽		■午前、日中戦争勃発の地・柳条湖へ。 当時の記録を展示した九・一八事変博物館を見学、その後、バスにて撫順へ ■撫順戰犯管理所、平頂山惨案遺址祈念館を見学 また今でも採掘を続けている石炭の露天掘りを下車にて見学。 ■夕食は老舗の「老邊餃子」にて中国でも名高い東北餃子をお楽しみ下さい。  ＜瀋陽・古都新世界酒店泊＞	朝:ホテル  昼:郷土料理  夕:老邊餃子
⑤ 7/13 (日)	瀋陽→NH926 成田	13:30 17:35	■張氏師府博物館及びショッピングの後、空港へ  ■空路、全日空（指定）にて帰国の途へ	朝:ホテル  昼:機内食

1. 出発日 2008年7月9日（水） 成田空港

2. 参加費 お一人 210,000円（航空運賃、宿泊費、飲食費、花輪及び燃油サーチャージ  
国際、中国国内の空港税、列車費用などの経費を含む）

3. 募集人員 20名（最少催行人員10名）

4. 申し込み締切り 2008年6月9日（月）（但し、満員になり次第締め切ります）

- \* 日程表の中、列車などの発車時刻については、一部改定する可能性も多く、変更することもありますので、ご了承ください。
- \* 取消料 出発3日前までは30%、出発前々日及び前日までは50%、当日は100%の取消料をお支払いいただきます。

## 方正友好交流の会 第4回総会のご案内

日時 : 6月7日（土）午後2時—4時半

場所 : 中央大学駿河台記念館 620号室 (電話 03-3292-3111)  
千代田区神田駿河台3-11-5  
(JR 御茶ノ水駅下車 徒歩2分 日大歯学部向い側)

議題 : 昨年度の活動報告、会計報告、今年度の活動予定

講演 : 中国残留邦人と方正日本人公墓

講師 : 井出孫六 先生

(作家。近著に『中国残留邦人—置き去られた六十余年』(岩波新書)がある。他に『終わりなき旅』や『満蒙の権益と開拓団の悲劇』など関連の著作がある。会報4号には、朝日新聞文化欄に掲載された「中国残留孤児」の国家賠償訴訟に関する連続エッセイ5編を収録させていただいた。小説『アトラス伝説』で75年に直木賞を受賞)

自由発題、自由討論

問い合わせ先：方正友好交流の会

事務局 大類、藤井

東京都千代田区神田小川町3-6  
(社) 日中科学技術文化センター内  
電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400  
[ohrui@jcst.or.jp](mailto:ohrui@jcst.or.jp)

散会後 懇親会（会費1000円） 日中科学技術文化センター会議室  
03-3295-0411

# 日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第4回

大類 善啓

## 《前回までの粗筋》

遼寧省で生まれた韓慶愈は、1943年「満州国」から茨城県の大田中学に留学したが、戦局は悪化、新潟から船で帰国しようとした。ところが、ソ連の参戦や日本の敗戦のため出港した船は中国へ行かず、日本に舞い戻ってきた。やっと日本から解放されたと思ったが、蒋介石の国民党代表団からは、「祖国を裏切った漢奸」とみなされ国民党に失望。新聞記者の見習いをしながら東工大に進学した。新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促した。韓も1953年の第1回の帰国船に学生代表として中国に行き、天津で廖承志に面会した。その時、廖は韓に、中国に帰国せず「日本に残り、華僑向けの新聞を出せ」という。韓は一瞬躊躇したが、日本に戻り、『大地報』という新聞を創刊した。日中関係は徐々に発展、1952年には、高良とみ、帆足計、宮腰喜助ら3人の国會議員がモスクワから訪中、日中貿易の先駆けを作った。その後、李徳全を団長とする中国紅十字会代表団や、京劇の名優・梅蘭芳も来日、韓は通訳などで活躍した。私生活でも美津と結婚、公私とも充実した人生を送っていた。

## 30 あるミステリアスな「事件」

順調に進んでいた日中関係といつても、まだ冷戦構造がくっきりと影を落していた時代である。共産中国と一線を画す日本政府は、それでも中国代表団が来ると、警察もしっかりと警護した。中国代表団も、国交を回復していない日本を訪問するというので緊張感もある。そんな状況の中、中国から卓球代表団が来日した。宿舎は赤坂プリンスホテルである。韓も代表団と一緒にホテル泊まりだ。

ある晩のこと、代表団の一人の女性が、ナイフを持った不審の男がやってきたと騒ぎだした。日本の警察は不対応で警戒に当たっている。代表団を襲う事件なら大変だ。団長も驚く。しかし、いくら探しても、そんな怪しげな男がやってきた痕跡はない。中庭にナイフを捨てたのではないか、と捜し回ったが出てこない。警察としても、一人ずつ呼んで事情調査を取る。中国側から騒ぎ出したから、今更なかったというわけにはいかない。

反中国的な行動は時たまはあることはあるが、どうも今回の騒動ははつきりしない。仮に台湾系の人がやるといっても、辻褄が合わない。韓は通訳という立場上「事件がなかった」というわけにもいかない。当事者の言うとおりに通訳しないと信頼感もなくなってしまう。

今思えば、団員の女性は極度の緊張感から出てきた妄想だったのではないか、と韓は思っている。日本には中国に敵対する「反動派」がいる、という激しい思い込みから、怖くて夢を見るようになったのではないか。しかし、中国側は事件は「ある」という。日本の警察は「ない」と思うという。警察が調査を取っても明確なイメージは掴めない。中国側は、危険なので警察は責任をもってしっかりと警備をやってくれという。警察は、一応最後まで調べますというが、結局うやむやになってしまった。今でも韓にはミステリーとして記憶に残っている「事件」だった。

### 3.1 日本警察との「交流」

中日友好協会、中日文化交流協会、中国国際貿易促進委員会、中国卓球協会などの訪日団が次々と来日した。韓はそのほとんどを通訳として同行、1年のうちひと月しか家に帰らなかつたということもあった。

当時は、日本の受入れ団体が、警備を日本の警察にお願いをする。日共時代から、警察対策としては、「警察には関わらない、調べに来ても拒否する」というのが韓たちの方針だった。しかし1954年の10月、「警視庁の杉山と申します」という電話が韓にかかってきた。すぐに電話を切ろうとしたが、杉山は「あなたにも重要な話だ。韓さんにも損のない話だ」という。電話のそばには、華僑総会の元副会長の黄さんがいた。彼に話すと、「中国にとって大事なことでプラスになるなら会おう」ということになった。ただ会いに行って、そのまま連行されるようになったら困るというので、黄さんが韓の後を密かにつけていくということになった。

さて、どこで杉山刑事と会おうかということになった。3年ほど前に「有楽町で会いましょう」という歌が流行っていた。韓の頭に有楽町があった。そこで会おうということになった。「杉山さんの顔を知らないから、何か目印でも」と言うと、杉山氏は、「私は韓さんのことはよく知っています」という。

有楽町駅の南口、そごうデパート側の改札口を出ると、小太りでがっちらりと体格のいい男が韓の方を見て手を振っている。「杉山です。韓さんは私のことを知らないでしょうが、私は3年間、ずっと韓さんを尾行していましたからよく知っていますよ」と言う。

喫茶店に入って、すぐに何のために俺を呼び出したのかと聞けば、杉山は「李徳全が来る。李徳全の安全を守るのが私の任務だ。ぜひ韓さんには、台湾関係や国民党の妨害勢力を見張るために協力してくれ」という依頼である。

杉山は、公安3課の唯一の通訳官だったという男である。中国紅十字会代表団の団長は李徳全女史だった。李徳全は当時50代後半、建国前から女性解放運動や児童福祉に従事していた女性だ。その李徳全のボディガードを柔道3段という杉山刑事がするという。

李徳全が乗る車の助手席に杉山が乗った。その李徳全が帰国した時、杉山は新聞記者から感想を求められた。杉山は一言、「感動しました」と語った。李徳全は、日本を離れる際、杉山にも感謝の心を込めて握手を求めたのだ。杉山は、日本の重鎮政治家たちのボディガードもやった経験はあるが、ついぞ彼らから握手を求められたということはなかった。黒子のように寄り添う彼に、李徳全女史は握手を求めたのだ。杉山は、そのことに感動したのだった。

中国から代表団が来ると、警視庁はチームを組んでホテルの部屋に陣取る。別の代表団が大阪や九州など地方へ行く際にも、常にチームの誰かが随行した。毎日顔を会わすから、自然と親しくなり友人のようなになってしまった。ある時、杉山から「上野署に転勤になります。近くに来たら、ぜひ寄ってください」と、警視庁から上野署に移動になったことを電話で知らせてきた。

「大地報」を止め、1970年に親族訪問ということで入国管理局に帰国申請をすると、やっと許可された。それまで何度か、帰国申請しても許可されなかつたのだ。当時の韓の帰国申請の窓口になつてゐたのは日本赤十字社だった。許可申請を具体的に協議し、判断を下すのは入国管理局と警察である。不許可になつたとしても理由は言わない。

許可されたのは、「大地報」を止めたからだろうか。韓はそんなことを思った。もしかしたら警視庁は、韓が華僑組織から左遷されたと思った可能性がある。

許可が下りてから、警視庁の町田という課長から電話がきた。「韓先生が中国へお帰りになるなら、お話を伺いたい」という誘いである。町田という人に会うのは初めてである。案内されたのは半蔵門にある、一見して普通のビルだ。しかし、それは警察が使用するためのビルだった。中には料亭もあるが、警察関係だけが使う施設である。

町田はこう韓に尋ねた。「どうも社会主義というものがわからない。資本主義というのは利で動く。これははっきりしている。社会主義というのは何がドライブするのでしょうか？ 何が能動的な力になるのでしょうか？ 社会主義を動かす積極的な要素とは何なのでしょう。主義、主張という理論的なものは、ドライブする要素としては弱いと思う。どうもその辺が理解できないのです」という質問である。なるほど、そういう考え方もあるのかと、韓は変に納得したことを覚えている。あの当時、韓は金で動いたことは一切ない。それは断言できる。しかし、今の中国を見ればどうだろう。みんな金で動く。毛沢東が亡くなり、改革開放だという。みんな自分に利益がないと動かない。時代の変遷を改めて韓は思うのだった。

### 3.2 文化大革命の影響

「大地報」は、文化大革命の影響で発行が危ぶまれてきた。指揮系統が乱れてきた。1967、8年頃になると、僑務委員会も解散させられた。政府機関が機能しなくなってきたのだ。連絡系統がなくなってきた。なにより廖承志自身が自由の身を奪われてしまった。廖承志の指示を信用しながら「大地報」を発行し続けていたが、紅衛兵が登場し、すべてが軍人の管理になってきた。

「大地報」という新聞を発行した経緯など、人民解放軍は知らない。彼らは韓のことも知らない。韓も解放軍のことを知らない。

大きくいえば韓も文革派である。しかし稳健派だった。それに対して極左派と呼ばれる人たちがいた。日本でも文化大革命を巡って争いが始まった。

韓は、「問題がある」といっても、結論は調査し研究してから出すべきだと、社説にも書いている。ところが、それに反対する人たちがいる。彼らは、「革命はお客様を呼んでご馳走をするものじゃない」という。裏を返せば、言論ではなく暴力だ。韓の言うことなど、「たわごと」だと一蹴されてしまう。完全に対立してしまった。

1968年、急進派が神田の鍛冶町にあった大地報社に押しかけてきた。社には写植機もあり、スタッフも7～8人いた。事前に何も知らされていなかった。彼らはやってくるなり、暴力的な行為に出た。成すすべもない。韓を助けた人は血だらけだ。

韓が、冷静になって結論を出そうと言つても、話し合う雰囲気ではない。「僕だって毛語録を讀んでいるよ」と言ったが、「こいつ、話してもわからん。やっちゃん」と、理屈も何もない。

それ以来、華僑運動は複雑な様相を呈してきた。華僑運動に関わっていた日本人の中には、韓の考えの方がまともだという声もあった。若い華僑青年の中にも、韓に同調する声が出てきた。こんな暴力騒ぎを本国はどう見るのか。しかし、廖承志に連絡も取れず、韓が知っている関係者も今や中国にはいなかった。中央に指示を仰いだら、解放軍の方から「新聞発行は止めろ」という指令が来た。未練はあったが、従わざるを得ない。廃刊である。警視庁から見れば、「負けた韓さん、戦線離脱した韓さん」と映ったのでないか。韓はそう思った。

それでも、中国語の「大地報」は15年続いた。孫文の時代、そして魯迅の時代でも中国語の出版物は出た。しかし、15年も出し続けた人はいなかつたろう。留学生や華僑たちが、いくつも中国語で新聞や本を出したが、官憲に潰されたり、財力がなく続かなかつた例が多いのだ。

もう少し、文革について韓に聞いてみよう。

1963年に中ソ論争が起こった。中国はソ連を修正主義と批判した。韓は、「これはただではすまないぞ」と思ったという。中国では、運動はなにごともエスカレートする。四清運動（政治、経済、組織、思想を清める）を見ていたので、「これは続くな」と見ていた。それが文化大革命だった。

中国共産党が日本共産党と対立した時、廖承志からは、「日共の立場に立つ者は、祖国の裏切り者だ」という指示が出ていた。当時 LT 貿易事務所があったが、指示はそこから出ていたのだ。韓は、理論的に見て、それが正しいかどうかというより、中国人としてどうしなきやいけないか、「中国がそうなっている」のだから、「中国人として自分もそれについて行く」という感じだったと述懐する。

中共は「銃口から政権は生まれる」と、自分たちの経験から言う。政権を議会で取ったという例はあるか。ない。「ソ連は政権を取った後は、修正主義だ。中国はいつも正統派だ」。人民日報や文献を読み、中国の放送を聞いたりすれば、不断革命だ、革命に継ぐ革命をしなきやいけない、という。文革がまさにそうだと韓には映った。「中国についていけば間違はない」。今から思えば、それは「間違っていた」と韓は反省をする。

それでも当時、幹部たちが三角頭巾を被せられ、紅衛兵たちに吊るし上げられる姿などを見ると、ハラハラしてしまう。見れば見るほど、自分との距離を感じてしまう。これではついていけない、という気持ちもあった。

1976年4月5日、その年の1月死去した周恩来を追悼する清明節の時（第一次天安門事件）、新しい友人たちは「我々は勝利しました」と言った。不逞の輩（周恩来を支持する人々）を倒したという。それが、その時の中国の流れだった。それを伝えた同じ人が、四人組が倒れれば、自分たちが正しかったという。全く戦争中の日本と同じだ。「批判的に言えば命はないのだから」と韓は言う。

文革が収束した時、韓は文革を支持したのは間違いだったと深く思った。「良識では判断できないのだ。自分で理解したように考えていたけど、文革が終わってから、やっと悟った。長生きするといろんなことを経験するものだ」と韓は呟くのだった。

### 3.3 初めての親族訪問

1970年、中国への帰国申請が許可されたので、韓は中国へ3ヶ月の旅をした。華僑総会から身分証を発行してもらい、赤十字社から日本再入国の許可をもらって日本を発った。文革の嵐の中にいるというので、香港に入つてすぐ、いの一番に人民服を買って着込んだ。

その香港を経由し、広州から上海に入った。上海には、すぐ下の弟がガラス工場の技術者として働いていた。前年に父を亡くし、母親が上海の弟の所に身を寄せていた。母とは27年ぶりの再会である。母たちと杭州に遊び、南京に行き、蘇州を回った。当時は華僑といえども観光する人など本当にいない時代だった。文革中だから観光地といえども閑散としている。

韓を接待してくれたのは公安だった。公安は、どんな気持ちで迎えてくれたのだろう。韓は中国から見れば、模範的な華僑であり、共産党を支持しているから問題はなかったろう。それにしても至れり尽くせりだ。韓が出かけると、ホテルに迎えに来てくれ車も出してくれる。見物にも公安が一緒についてくる。金を渡すわけではないが、ガイドもしてくれる。「観光する」ということは、そういう仕組みになっているのだった。

文革中の真最中だから、戦争中の日本と同じだ。「戦争に備え、災害に備え、人民に服務する」という毛沢東のスローガンが至る所にある。上海でも田舎でもどこでも、地下壕や防空壕を掘っている。モグラにみたいに掘っているのだ。土を運び出して土盛りをしている。それが見えるのだ。69年のダマンスキ島（珍宝島事件）の時以来だ。今にソ連が攻めて来る。ソ連の攻撃に備えようというのだった。

文化大革命のイメージは美しく描かれていた。しかし戦争中、日本にいた韓には、よくわかつていた。戦争中の日本と全く同じなのだ。食券も衣料も切符制で配給だ。安全部、公安といつても、警察は日本より巧妙だ。旅行社の人間といつても、後で聞けば、公安局だ。弟も監視の中だということがわかつってきた。日本より何倍も管理とコントロールの中にいたのだ。弟の所に泊まるといつても、届けなければいけない。どこにいようと居所はちゃんと押さえられていた。

韓の従兄弟が天津にいる。労働者上がりの技術者で、韓とは一つ違った。小さい時に遊んだ仲間だった。その彼に会おうと、韓は母と一緒に天津に行き、彼の家を訪ねた。それがいけなかつた。彼は、警察から睨まれ、追及された。「あいつは何者だ。資本主義国家から来たスパイじゃないか」と追求されたのだ。

そういうことが、後からわかつた。1978年、品質管理の技術交流団で天津へ行った時だった。団長は武蔵工大の学長であり東大名誉教授の石川馨さんだ。接待側の中国国際貿易促進委員会に、「実は天津に私の従兄弟がいる。工場の技師長だ。良かったら会いに来てほしい」と頼んだ。しかし連絡は来なかつた。中国は、組織だったことにかけては世界屈指の国だ。どこに居るかは完全に把握しているはずだ。それなのにやって来ない。

それから4、5年経って軽工業品展覧会の時に、もう一度呼びかけた。そうしたらやって來た。1970年に、韓が彼を訪ねた時、そのことによって彼はいろいろと批判されたらしい。時には、犯罪者扱いだったというのだ。そりや悪かったと韓は謝った。確かに、当時は親族訪問といって、懐かしい昔の中学生時代の同級生を訪ねようと思っても、「訪問はするな、食事はするな、そんなことをすれば相手に迷惑がかかる」と日本で聞いていたので、よほど関係がない限り会わなかつた。しかし従兄弟だから大丈夫と韓は思ったが、それが迷惑を及ぼしたのだった。

### 34 韓も「スパイ」と疑われていた

今では想像もできないような話だが、中国国内の人々は、出張以外に地方に出る時などは、然るべき理由がないと出られなかつた。自分の金で行こうとしても、職場からの証明書がないと切符が買えない時代だった。

大連からハルビンの車中では、俺たちはどこそこで武闘したとか、銃をかっぱらつたかという話を乗客たちはしている。韓は、関心はあったが黙つて聞いていた。その議論の輪に入ると、お前はどこの派だと言われかねないからだ。

そのハルビンの弟の所へ行った時は、国家安全部の人間がジープで迎えにきてくれ同行してくれた。それには、こういう事情があった。当時は、韓が日本にいるというだけで、反動派だ、スパイだ、国民党やアメリカの特務だ、と決めつける時代である。弟は青岡県で仕事をしていたが、幹部として出世するかどうかは、共産党の党员であることが重要な決め手になる。弟は県の課長クラスである。入党申請をすると、家族関係も調べられる。その中で問題になるのは韓慶愈の存在だ。兄は、留学生として日本に渡つた。兄は「日本のスパイ」じゃないか。こういう兄を持つ

弟を入党させるわけにはいかない。韓が、どういう人間なのかを調べる手立てはない。当時は、廖承志も捕われの身だ。弟がいる青岡県から、兄がどういう人間なのか、韓の身元を調べるために調査員が北京に派遣された。文革の時は、外交部の韓の知り合いはみんな下放されていなかった。ところが陳抗がいたのだ。

陳抗は 1964 年に L T 貿易事務所が開設された時、首席代表の孫平化のもと、二人いた代表の一人として活動していた。文革が発動して帰国したが、当時の陳抗は外交部の日本処の処長（課長）だった。韓が旅日（留日）華僑青年連誼会の主席をしていたことも知っており、中国代表団の訪日を報道する『人民日報』に、青年連誼会主席である韓も参加しているという記事が出たこともあり、それが裏づけになった。陳抗はそのことをよく知っており「韓慶愈は日本で活動している進歩的な人間だ。全く問題はない」と言った。その一言で、弟の入党申請は許可されたのだ。

陳抗は、本当のことを言ったに過ぎなかった。しかし韓は、陳抗に感謝の気持ちをもっている。外国と関りがあることが、ことごとく悪いように取られる時代である。陳抗が「韓についてはわからん。知らない」と言った方がいいような 1969 年頃のことである。

そういう経緯もあり、韓慶愈は大変立派な人物だというので、丁重にもてなしてくれたのだ。北京に、韓慶愈のことを調査に行った男も、お兄さんの様子を見たいと会いに来た。弟も兄が誇らしく喜んでくれた。

ちなみに陳抗はその後、日本の中国大使館で文化参事官、北海道総領事館で総領事の任に就き、その後、マレーシア大使として赴任した。

余談になるが、筆者も陳抗とは少しばかりお付き合いがあった。戦前、旧満州の建国大学に入学後、革命運動に入った陳抗は、官僚ぶらない人柄もあって、日本には多くの陳抗ファンがいた。私もその人柄に魅せられた。最初に会った頃は、マレーシア大使を務め上げた後、旧建国大学跡地に総合大学を創立する企画や、日中関係史をまとめるという仕事を陳抗がやっていた頃である。成田空港に出迎え、宿舎のホテルに案内する間、滑らかな日本語を話す陳抗と気さくに話をした。ホテルに着くなり陳は、「僕は大類さんを気に入りそうだ。自宅の電話番号を教えてくれる」と聞かれた。中国の高官だった人に、このような官僚離れしていて人間味のある人は初めてだった。それもあってこういう文章でも、「陳抗さん」と書きたくなる。日本に来る時、何度か自宅に電話をもらったことがあり、いろんな所に同行したことが今でも懐かしく思い出される。その陳抗も 1993 年北京で亡くなった。享年 70 歳だった。

閑話休題。韓の弟の所に、韓の娘、韓洋が訪ねて来てくれた。1953 年に生まれた韓洋は、1959 年日本を離れ、中国に行ってから、11 年ぶりの娘との再会である。娘は当初、北京の中学校の宿舎に住んでいたが、自ら下放を申し出て、黒竜江省三江平原の奥地、富錦県の荒地にいた。冬は酷寒の地だ。そこで、とうもろこしなどを作っていた。まだ 16 歳の子どもである。下放も「革命なのだ」と思っている。疑問はいだかなかつたようだった。娘を連れて同じホテルに泊まった。親子の情愛は当然ある。しかしづつと断絶状態だったから、娘も父のことをはかりかねている。韓は、本心としては長く娘と一緒にいてほしいと思っている。しかし、「下放はいい」と思っている標準以上の共産党最員である。韓は、娘が下放先から会いに来たのに、「早く働いているところに帰りなさい。下放した所は大事だ。早く帰らないと批判されるよ」と言ってしまう。今から思えば、娘を追い返すような言葉が出るのだった。娘は素直に従った。今思うと、娘を教育するために、優等生的なことばかり言つたようだと韓には思い出されるのだった。（次回に続く）

## 方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

### ——「方正友好交流の会」へのお誘い——

中国ハルビン市郊外の方正県に、日本人公墓が建立されています。1945年敗戦のさなか、祖国を目指して逃げ惑った旧満洲の開拓団の人々は、難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々がこの方正の地で息絶えました。それから数年、累々たる白骨の山を見た、ある残留日本婦人が骨を拾い集めました。力を貸した中国人たちが集めた遺骨はおよそ五千体近いともいわれています。

その人たちを祀るお墓が「方正地区日本人公墓」です。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者として手厚く方正に葬ってくれ、公墓が建立されました。3年後に中国全土で吹き荒れた“文化大革命”では、外国文化や古いモラルに繋がるものが破壊しつくされた中、方正地区日本人公墓は中国人の手によって守り抜かれました。

中国で唯一、建立を許されたこの日本人公墓こそ、日中関係がいかなる時代にあっても、友好の思いを回帰させるに最もふさわしい地といえるでしょう。

ナショナリズムを超えた国際的な友好の精神から生まれた日本人公墓の存在は、今後の日中関係だけでなく世界のありようを考える時、ますます大きな意味を私たちに教えるものと思います。

公墓の存在は、残念ながら一部の関係者にしか知られていませんでした。「方正友好交流の会」は、民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を多くの人々に知ってもらおう、維持管理の面でも日本が協力して活動していくことを設立いたしました。この日中友好の原点の地ともいべき「方正」に、更に光を当てることができればと活動を続けています。ご理解とご支援をお願い申し上げます。

方正友好交流の会 事務局（大類善啓）

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400

E-mail : [ohrui@jcst.or.jp](mailto:ohrui@jcst.or.jp)

郵便振替口座番号 00130-5-426643

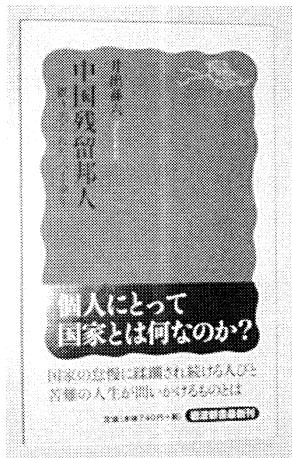
加入者名 方正友好交流の会

## 《書籍案内》

### 『中国残留邦人—置き去られた六十余年』

井出孫六著 岩波新書 740円（税別）

「冷たい日本」という国家が見えてくる



著者は、本誌の読者にはおなじみだろう。長年、残留婦人や孤児たちが置き去りにされてきた問題を追及してきた作家である。1986年に発表した『終わりなき旅——「中国残留孤児」の歴史と現在』は、日本政府の無策によって翻弄された残留孤児を巡る状況を、常に自分の課題として受け止め、問題点を明らかにしてきた。

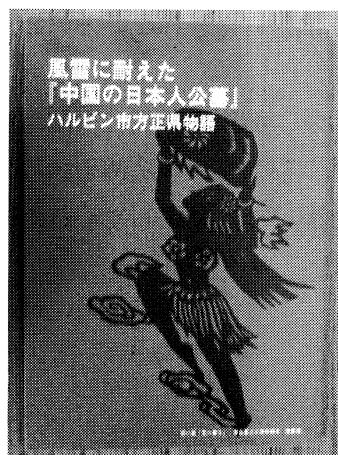
本書は、「国策」として進められた満蒙開拓が、関東軍の後ろ盾で強引に行われ、「満州」の前に、多くの日本人たちがいかに判断停止状況に置かれ、泥沼にはまり込んでいったかを、具体的な資料で明らかにしている。

また、戦後の引揚げが、外務省の状況認識の鈍さと無策、厚生省が引揚げ問題の責任官庁になった故に遅延してしまった問題点などを明らかにしている。「満州国」の指導者であった岸信介の登場など、戦後政治が残留問題を正面から取り上げようとせず、結果的に民間の有志の力によつてしか残留邦人たちが帰国できなかつた経緯や、国家賠償訴訟に踏み出さざるを得なかつた人々の実情に追つてゐる。

国家の怠慢によって、非情な状況に追いやられた人々の姿を描きつつ、日本の国家とは何なのか、その非人間的な側面を根底から問い合わせている。巻末資料には、残留孤児訴訟で初めて「血の通つた判決」といわれた神戸地裁の判決文なども収録され、「残留問題」を論じるには欠かせない書だ。（啓）

### 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」—ハルビン市方正県物語—』

定価 1500円



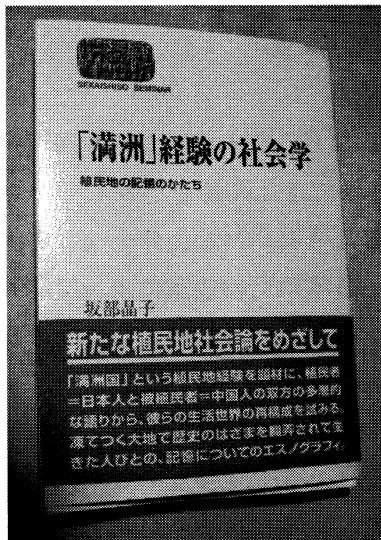
日本人公墓の建立の軌跡や由来を王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県の住民の家に住み込み、全身全霊で稻作指導に捧げ「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立でも活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆。また「方正友好交流の会」成立以前から支えた人々の座談会を、牧野史敬が司会進行した記録などを収録している。

（当会が編集発行、事務局に残部あります。お電話ください）

## 「満州」経験の社会学

—植民地の記憶のかたち—

坂部 晶子著 世界思想社 定価 2300 円 (税別)



「満州」には、さまざまな人間が関わった。1945年にこの「虚妄」の国家は消えたが、これに関わった人たちには、さまざまな形の記憶が残った。開拓団の入植者として苦難の末に故郷に帰った人たち、被害者として侵略の記憶を筆者に語り続けた中国の人たち、日本各地に建立された記念碑の諸相、こうしたさまざまな形で残された「満州経験」を著者は丹念に訪ねて聞き取り、写真に収めてきた。

長野県の天竜村に建てられた慰靈碑は、平岡ダム建設のために強制連行されて殉難した中国人のために、満州からの引き揚げ者によって1964年に建立されたものだが、中国の方正県に中国政府が日本人公墓を建立してくれた、同じ時期である。

長野県内に建てられた慰靈碑、殉難碑52の碑文のうち、満州開拓なる国策に否定的な表現が4、肯定もしくは中立的なものが32とある。一方、佳木斯の中国人Lさんは、訪ねた坂部さんを、まるで自分の娘に語り聞かせるように、1週間も泊めて話してくれた。こうして、さまざまな植民地経験の「語り」に接してきた著者は「これまでの聞き取り研究の多くは、ある特定の階層や経験者集団に焦点化されたものが多い。そこではマイノリティとされてきた人びとの生活世界の提示により、それまでの歴史理解の相対化が意図されていると考えられる。本書では「満州経験の多様な語りに焦点をあててみたい」とその序章で宣言したあと、さまざまなフィールドで多様な証言を紹介しながら終章の「一元化された記憶の語りに抗して」というパートで、重ねて次のように書いている。

「本書においては、歴史の記憶を、多面的で多層的なかたちで示すことに重点をおいてきた。それは、『満州』という植民地の経験は、そのように多層的な人びとの語りによって、構成されてきているからである。そして、この多声的な記憶の語りが織りなしている植民地経験の言説空間を理解することなしには、植民地の当事者たちの、複雑で屈折した語りはとらえきれないと思われるからである」

著者は現在、島根県立大学総合政策学部准教。専門領域は文化社会学、植民地研究、中国地域研究。3年前、当方正友好交流の会が再スタートしたときに、当時、京都大学大学院博士課程であったが、多忙な研究の時間を割いてくれ、いち早く若い仲間たちと駆けつけ励ましてくれた方である。(正)

## 『大陸の花嫁』

井筒紀久枝著 岩波現代文庫  
定価 900 円（税別）

阿鼻叫喚の満州から引揚げてきて・・・



昭和 18 年 1 月、母に「おっか、うら、満州へ行く」と呟く。尋常小学校を出て「越前和紙の里」の紙漉き女工になった著者は、やや不良だが、好きだった仕事仲間の M と二人で村を逃げ出したかった。が、母も時代も許さず、「もうこんなとこにいとうない」という気持ちで満州へ行くことを決意。小学校の校長に手紙を出す。当時の校長の時事訓話は、いいことづくめの満州の話だった。校長はすぐに、福井県から満州開拓を行っている独身青年の名簿を取り寄せた。

夫になる人は、「満蒙開拓青少年義勇軍」の一人として渡満していたが、結婚のため帰国。二人は、故郷を経って 12 日、着いた先はチチハルから更に奥に入った地だ。当時の著者の住所は、満州國龍江省（現黒竜江省）甘南県拉哈弁事務所気付、第一次興亜義勇隊開拓団、彼女は 22 歳、夫は 23 歳だった。昭和 19 年、夫は二人の中国人苦力を雇い、馬や牛を放牧しながら燃料の野草刈りをし、妻である著者は畜産の指導を受け、搾乳や牛のお産の手伝いをしていたが、戦局は悪化。女の子を身ごもったが、男たちに召集令状が来た。

昭和 20 年春、義勇隊集落は男 3 人、女 13 人、幼児 8 人になっていた。治安は悪化、女たちが重たい銃を持って夜警に立つ。しかし敗戦、「満州國」は崩壊した。興亜開拓団にもソ連兵と中国兵が宿舎に乱入、手当たり次第に略奪した後、女を漁った。現地住民も襲ってきた。

それから彷徨が始まった。チチハルの収容所で八路軍が縫製工を募集に来た時、子連れでもいいというので応募、その後、日本人会の斡旋で中国人の幼児の乳母になりながら、葫蘆島から引揚げてくることができた。2 歳ぐらいの幼児はほとんど現地で亡くなっていたが、彼女は必死の思いで愛児を育て、故郷に連れ帰ることはできたが、2 年半の命だった。

帰国後も波乱の人生を歩む著者は、満州追憶の俳句を詠み、平成 5 年（1993 年）NHK 学園 30 周年記念自分史文学賞に応募し大賞を受賞。それを基に 8 年後、『大陸の花嫁』を自費出版した。

著者の次女が、新谷陽子さんだ。京都の城陽市在住で本会の会員である。新谷さんは、戦争体験者たちの声をもっと多く伝える必要があると、『大陸の花嫁』の再刊を思い立つ。坂本龍彦さんの助力もあり、2004 年 1 月岩波現代文庫として本書が刊行された。巻末に新谷さんが「戦争を語り継ぐために」という文章を寄せている。戦争体験、満州体験が風化しつつあるなか、「満州國」の実体が、王道樂土、五族協和と謳われたのといかに違っていたかを、読者は本書を読んで実感するだろう。刊行されてから 4 年、遅ればせながらの紹介である。（啓）

## 『中学生の満州敗戦日記』

今井和也著 岩波ジュニア新書

780円（税別）

満州で敗戦を迎えた中学生はどう生きたか



近年、満州に関する本が数多く刊行されている。体験者の手記も少なからずあるが、本書が一味違った感慨をもたらすのは、当時、中学生だった著者の目から見た敗戦前後の満州が描かれているからだ。

著者は1931年生まれ、敗戦時はハルビン中学の3年生、14歳の時だった。夏休みの間、奥地の開拓団に配属された。ところが8月9日のソ連の満州侵攻、日本の敗戦によって大混乱。無蓋車に乗ってやっとハルビンの家にたどり着いた。家族たちは、待ち望んでいた息子の帰宅を喜んだ。

ところが友人のHは、違った。父は、軍医で陸軍中佐、その家族はHを残して日本に帰国した。「あなたを残していくのはほんとうにせつないけれど、軍の命令なので仕方がありません。がんばって一人で日本に帰ってきてください。日本の住所はつぎのところです。どうしても駄目な場合はこれを使ってください」という手紙の横には、長さ40センチくらいの一本の短刀がおいてある。万一、どうしようもなくなったら、自殺しろという置き手紙だ。

Hは一年後、帰国した。「ごめんね、生きていてよかった」と母は涙を流して彼を抱きしめた。しかし、Hは心の底では、自分を置き去りにした両親をずっと許していない、という。

昨日まで親しかった中国人たちが、日本の崩壊を喜ぶ姿にショックを受ける少年、体罰をしない教師の顔が思い出せないほど、暴力教師が多かった時代。大人が働く場所がないので、母の着物を売るために街頭に出る。他の少年たちも街に立って逞しく働く姿など、現代の中学生が想像すら出来ないような生活が描かれている。ぜひ今の中高生に読ませたい。（啓）

## 『天を恨み 地を呪いました—中国方正の日本人公墓を守った人々—』

奥村正雄 編著 定価 700円

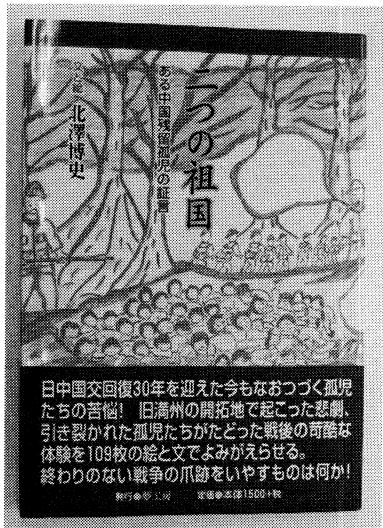


この本に書かれた文章は、前出の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」—ハルビン市方正県物語』にも収録されているが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちゑさんの息子さんの貴重な体験記も入っている。この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。

電話 043-272-9995 FAX 043-272-0214

## 『二つの祖国 ある中国残留孤児の証言』

北澤博史 著 定価 1500 円



著者の北澤さんは 1935 年長野県赤穂村で生まれ、1940 年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様子や難民となった苛酷な体験を絵と文で描写されています。収録された絵がなんともいえず当時の雰囲気を醸し出しています。直接下記の北澤さんか当会に申し込んでください。

〒250-0001 神奈川県小田原市扇町 1-21  
-10 電話 0465-35-2531

### ありがとうございました

今年、会報 5 号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意に代えます。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。  
08年5月7日現在です)

根本勝利 黒岩満喜 三森陽子 森田重夫 NPO法人二つの観音様を考える会 理事長天竺桂尚穂  
栗原貞子 猪股祐介 石原健一 伊藤州一 原磯子 福久かずえ 米山惇 玉山昌顕 平方明男  
芹沢昇雄 青木孝 穂苅甲子男 滋賀県日中友好協会 金丸千尋 武吉次朗 新田篤実 岩曾弘三  
羽田澄子 小林勝人 石田和久 石原政子 魚崎宏 渡辺亮介 岡崎友美 小関光二 手塚登士雄  
杉田春恵 渡辺保雄 山本勝彦 中島紀子 遠藤勇 伊原忠 山内良子 北澤博史 神崎助男  
福井以津子 田中宏 山川伊一郎 高橋健男 小畠正子 萩原武太郎 林郁 (株)創土社・酒井武史  
(社)日中協会 生田和美 内山則男 駒形好幸 藤原知秋 片岡稔恵 菊地薰 窪田かづよ 兵頭義清  
秋葉二郎 宮腰直子 田村正篤 名取敬和 秋田県日本中国友好協会 石田和久 小柴玲子  
河野太刀男 岡田久子 矢野光雄 駒ヶ嶺法子 伊藤幸枝 瀧龜久男 大石田町日中友好協会  
野崎美佐子 有馬和子 山村文子 松尾政司 金子静子 加藤重幸 鈴木孝治 成田晃一

-----  
《表紙写真撮影・方正県政府外事僑務弁公室提供》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第 6 号) 2008 年 5 月 16 日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email : [ohrui@jcst.or.jp](mailto:ohrui@jcst.or.jp)

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-6 日本分譲住宅会館 4 F

(社)日中科学技術文化センター内 電話:03-3295-0411 FAX:03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>